
天翔る剣士

ダルトン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天翔る剣士

【Nコード】

N79320

【作者名】

ダルトン

【あらすじ】

桜咲刹那の双子の兄に転生したオリ主が何かやります。

プロローグ（前書き）

同じ原作での終わってない別作品がありますが、あれはあれ、これはこれって事で。

ブローグ

「ごめんなさい!!!」

「はい？」

いきなり何ですか？

周りは真っ白い空間で、僕の目の前に
頭の上に浮いた光の輪。背中には白い翼を生やし。白いワンピース
を着た金髪幼女が泣きながら土下座をしています。

訳が分かりません。

とりあえず、泣いている幼女の頭を撫でました。

「!？」

少し吃驚したみたいですが、泣き止んでくれました。

状況を確認する為に幼女に質問してみましよう。

「…え」と、状況を確認したいのですが。
貴女は誰で、此処は何処ですか？」

「わ…私は、ミカエルです。
そして此処は、霊界の入口の管理室です。」

幼女は、恋姫無双の月さんに顔がそっくりで
名前はミカエルだそうです。

……益々、訳が分かりません。

いえ、実際は理解したくないだけで…。

………諦めます。

僕は、死にましたね。

「ミカエル？大天使やら力天使やらのですか？」

「…そうです。後、仏教だと不動明王です。」

え？ミカエルって不動明王なの？
初耳なんですが。

立場的に似た感じはしますけど……。

まあ、宗教に特に詳しい訳でも無いし
衆論はどちら負けても釈迦の恥と言いますし。

何か間違っている気もしますが考えたら負けという事でスルーです。

「霊界の入口の管理室って？」

「霊界の入口は、魂の待合室です。
整理番号を呼ばれたら、閻魔大王の執務室に入り天国か地獄行きを
決定します。」

管理室は従業員以外立ち入り禁止の部屋です。」

スタッフルームか。

「それで、僕の死因は先程の土下座から考えて貴女が原因という事
ですか？」

「…はい、私がお友達とダーツで遊んでいたら、私の投げた矢が外
れて貴方の額のド真ん中にブスリと……。」

「ジーザス（何てこつたい）！！」

天使の矢に射られ、恋に落ちるところか
冥府魔道に落ちるとは！！

まあ、過ぎたるは及ばざるが如しです。

それはともかく、少し気になる事が。

「因みに、一緒に遊んでいたお友達とやらは？」

「あたしよ！」

いきなり現れ声を上げたのは
眼鏡を掛けた中華な官位服の銀髪美少女。

ていつか今度は、詠です。

二人共髪の色以外そっくりです。

「あつ、ヤマちゃん！」

「お待たせ、ミカ！」

ミカエルを略してミカですか。

だとすれば、ヤマちゃんと呼ばれた少女の正体が気になります。

「いきなり現れた貴女は誰ですか？」

「僕は、閻魔大王よ！」

やっぱり、ヤーマでした。

宗教観滅多切りです。

「貴女は今まで何処に居たんですか？」

「仕事しながら閻魔帳であんたの事を調べていたのよ。」

友達を放って逃げたのではなかったみたいです。

「そんなの当たり前じゃない!!」

地の文にツツコミを入れないで下さい。

「（それでどうだったのヤマちゃん？）」

「（これ位なら問題ないわね。」

歴史に名を残すような奴じゃないわ。）」

二人がひそひそと何か話してます。

「ひょっとして僕の行き先が決まりました？」

「まあ一応ね。

あんた異世界に転生してみない？」

「異世界転生って、元の世界じゃ駄目なんですか？」

「…はい、普通の世界では死んだら生きかえれません。
…私のせいで…ごめんなさい。」

「ああ、気にしないで下さい。」

「へうゝ！？」

また泣きそうになったので、また頭を撫でて落ち着かせました。
しかし“へうゝっ”てマジに月みたいです。

「ほんの一時でも貴女のような可愛い方に会えて満足ですから。」

「へう…か…可愛いですか？」

「ええ、とっても。」

「ちょっとあんたミカに何を!？」

ヤマが怒ったので、ヤマの頭も撫でました。

「ヤマも可愛いですよ?」

「あう!?!?!?!あう!?!?!あう!?!?!」

ヤマは“あう”でした。

「ところで、普通の世界はって事は
僕が転生する世界は普通じゃないと?」

「あんたの転生先は漫画の【魔法先生ネギま!】の世界よ!?!」

「正気ですか!?!」

思わずケンコバ風にツッコミを入れてしまった自分は悪くないと思う。

「もちろん正気よ!

因みに平行世界だから、原作に影響は無いわ!」

「……ごめんなさい。ヤマちゃん…閻魔大王の下した判決は覆らないんです。」

「……仕方ありませんね。」

では、転生するにあたり幾つか希望を叶えてもらいますよ。」

「此方としてもそのつもりだったんだけどね。叶えられる希望は5個。

あんまり度を越したのは無理よ?。」

「そうですか。とりあえず聞いてから判断して下さい。」

1つ目、桜咲刹那の双子の兄として転生する。

2つ目、3歳で転生者として覚醒する。

3つ目、鍛えれば鍛える程に各能力が上がる限界突破。

4つ目、翼に月の光を取り込ませると更に能力がアップ。

5つ目、風を媒介にした転移術。

以上ですが、どうですか?。」

「…どう、ヤマちゃん?。」

「うーん…問題ないと思う。」

聞くけどそれぞれの理由は?。」

「刹那と木乃香は好きなので守りたいのと、翼を持ってみたいなって思っ

世の中にも翼を欲しがる歌が結構あるし。
後は、強くなる必要がある世界ですので
上限を無くしたいんです。

サテライト・システムはオマケです。
風の転移は自由に旅をする為です。」

「不老不死とか超絶美形にしろとかは考えなかったの？」

「刹那と双子の兄妹なら不細工な外見にならないと思ひまして。
それに老いを楽しむが英国紳士です。」

「あんた何処の執事よ？」

まあそうね、外見は刹那をより格好良くした感じにするわ。」

「良いんですか？」

5つ以上になるのでは？

「転生先と兄妹なんだし、これ位なら許容範囲内よ。」

どうやら許容範囲内みたいです。

「そろそろ転生させるけど、心の準備は万端か？」

「貴女こそ何処の英雄ですか？

……何時でもどうぞ。」

「じゃあ逝かせるわよ、ミカ！」

「分かったヤマちゃん！」

……今、何か不穏な字があつたような。

「やっまやまにするわよ！」

ヤマが妙ちきりんな言葉を発すると
僕の足下に円陣が描かれました。

「みつかみかにします！」

今度はミカが妙ちきりんな言葉を発して
僕の頭上にジャンプ。

其処から前方に一回転して踵を——って！？

すっこおおおおおん！

ミカの踵落としが

僕の頭にクリティカル・ヒットすると

円陣の内側が穴になり

僕は落っこちました。

とりあえず、先程見えたミカの下着は白かった。

プロローグ（後書き）

反省も後悔もしません。

第一話『鳥族の里』（前書き）

主人公設定

名前：桜咲さくらさき 刹羅せつら

性別：男

種族：人間と鳥族のハーフ

能力：各能力向上値無限 風の転移術
サテライト・システム擬きな翼

性格：どうでも良いものとはことんどうでも良く、大切なものとはことん大切にする。

備考：転生者で、桜咲刹那の双子の兄

第一話『鳥族の里』

人気の無い山奥で、白い短髪に鳥族の服を着た少年が木刀を振っている。

『桜咲 刹羅^{せつら}』 5歳です。

3歳の誕生日に転生者として覚醒しました。

現在、鳥族の里に住んでいます。

家族構成は、自分、愛妹の刹那、鳥族の母・刹子。

人間である神鳴流剣士の父・那羅^{なろ}は通い婚でなかなか家に来れません。

まあ、来ると母と一緒に、此方が砂を吐く位甘ったるい空間を造り上げるので助かります。

修行については、刹那も一緒に

父親から基礎体力作り、基本的な剣術、精神修行。

母親からは、飛行能力や視力トレーニングを学んでいます。

現在、両親は関西呪術協会の任務について家に居ないので自主トレです。試しに>感卦法<をやったら出来ました。

まあ、問題無いんでしょう。

雑種ってのは純血種よりも生物学的に優れてるもんさと何処かの妖怪とのハーフも言っていましたしね。

「——さて、今日はこの辺にしますか。」

自主トレを終えて家路につきます。

時刻は夕方です。

——ザワ。

風の声が聞こえます。

精神修行で、会話とまではいきませんが
精霊の音が聞こえるようになりました。

「——刹那は僕が守ります。」

僕は、背の白い翼を展開をする。

「——転移。」

一陣の風が吹くと

刹羅はその場から姿を消した。

く刹那サイドく

「「「やゝい禁忌の子!」「」」

サイドテールの白い髪、背には白い翼を持つ少女に向かって、子ども達が石ころを投げつける。

うちが何したん？

何時も里を歩くと、子ども達から苛められるし、大人からは嫌な目を向けられる。

白い髪や羽根がそんなに悪いん？

「——痛っ!」

石ころの一つが、うちの頭に当たって血が流れる。

……………我慢や。兄上に迷惑かけた無い。

うちが泣いたら兄上がまた喧嘩して
大人達から理不尽な文句を言われる。

うちは泣くのを堪えながら唇を噛み締める。

「フライング・ドリル！！！」

「ぶぺえっ！？」

突然の乱入者の

錐もみ回転した両足での飛び蹴りが
いじめっ子の一人を吹っ飛ばした。

乱入者は着地と共に言葉を発する。

「いじめっ子は許さない！！！」

く刹那サイド・アウトく

く刹羅サイドく

里の上空に轉移しました。 > 鷹の目くレベルに鍛え上げた眼力で状

況確認します。

刹那を見つけました。

里の子ども達に囲まれて額から血を――

ブチギレマシタ。

一人に狙いを定めて急降下。

「フライング・ドリル！！！」

「ぶぺえっ！？」

横回転しながら蹴り飛ばすと
奇声を放ちながら吹き飛びました。

「いじめっ子は許さない！！！」

思わず某ロープレ伝説の勇者の決め台詞を言い放ってしまった。
とりあえず敵を蹴散らします。

「竜巻旋風脚！！！」

「あべしっ！？」

「反動三段蹴り！！！」

「ひでぶっ！？」

「鷲座閃光！！！」

「たわばっ！？」

五秒で文字通り蹴散らしました。

刹那の側に寄り、額に手を当てます。

「…あ…兄上。」

治癒術で傷を全部治しました。

「大丈夫か刹那？」

刹那の頭を撫でながら質問しました。

「だ…大丈夫や。ありがとうございます兄上。」

真っ赤な顔で答えてくれました。

可愛いです。お持ち帰り…っで、一緒に住んでました。

「…あ…兄上こそ大丈夫なん？
また大人達が文句言ってくるえ？」

「僕はそんなの平気ですよ。
刹那が傷付く事の方が嫌です。
さあ、家に帰りましょう。」

「おい刹那！！」

てくてく家に向かって歩いていると
僕を呼ぶ声が聞こえました。
声の主に目を向けます。

「おや、霞さん如何しました？」

「さつき、屋根の上で寝とつたら空からお前が降ってくるのが見えてな。刹那の一大事だったんやろ。刹那に怪我は無いんか？」

「有りましたが、僕が治しました。」

「ガキ共に苛められたんか！？」

「その通りです。」

「……あいつら、ホンマに！！」

霞さん、かなり険しい顔をしていますね。

この人は鳥族の里の長老の孫娘で僕達より一歳年上の、霞かすみさんです。

“しあ”ではありません。

どんなにそっくりでも違います。

黒髪だし、服装だって鳥族のです。

飛龍エン月刀も持ってません。

「……ごめんなあ刹那。」

「霞さんのせいやあらへん！」

霞さんは、この里の者では珍しく僕達を受け入れてくれています。

大雑把な感じですが、面倒見の良い人です。

「あつそうや、来るときに爺様が二人を呼んで来い言っとったわ!」

「僕達を長老がですか?」

「そうや。」

「兄上、一体どんな用やる?」

「行ってみないと分かりませんね。
行きましょう刹那、霞さん。」

刹那の手を繋ぎ歩きます。

霞さんが羨ましそうに刹那を見ている。

何ですかね?

「長老の家」

座敷に上がりました。

「只今や！二人を連れて来たで！」

「うむ、御苦労。お帰りじゃ霞。」

霞さんと長老が挨拶。

部屋には長老と、黒髪で眼鏡を掛けた里の者とは違う男が居ます。
原作キャラの近衛詠春です。

「お邪魔します。」

「お…お邪魔します。」

僕の上に刹那が気後れしながら頭を下げます。

「苦しゅうない面を上げよ。」

「はっ。して如何様な御用件で御座いますか？」

「お主らに話しが有るのは、此方の御仁
関西呪術協会の長・近衛詠春殿じゃ。」

「初めまして、刹羅君、刹那君。」

近衛詠春です。」

「初めまして、詠春様。 > 鍋將軍<の御高名は存じ上げています。」

「ぶっは！？ど…どうしてそれを！？」

「適当に流して下さい。」

また思わず言ってしまった。

吃驚する詠春さん。

他の人達はキョトンとしています。

「…そうですか、んん。」

気を取り直す詠春さん。

「ええ…今日、此処に来た理由ですが…。」

何か言いづらそうな詠春さんが、覚悟を決めた表情で言葉を発する。

「……お二人のご両親が、お亡くなりになりました。」

第一話『鳥族の里』（後書き）

何故、恋姫っぽいキャラが出るのか。

それは『恋姫水滸伝』つてのを考えて
人数の多さに『恋姫』以外に『ネギま』や

『ハヤテのごとく』などからキャラ引用をしようとして挫折した名
残です。

第二話『近衛木乃香』（前書き）

心理描写って難しいですね。

京都弁も難しいです。

第二話『近衛木乃香』

両親の訃報に、刹那が大泣きしていたのは理解出来ますが、まさか自分も涙を流すとは思いませんでした。

……僕にとっても、大切な家族だったんですね。

両親を弔った後

刹那と一緒に、詠春さんに引き取られ
関西呪術協会総本山で暮らす事になりました。 > 神鳴流くも学びます。

鳥族の里から離れる時、霞さんだけ寂しそうな表情をしていたのが印象的でした。

「私の娘が、君達二人と同年でして
二人に守って欲しいのと、娘の遊び相手になって頂けませんか？」

と、僕と刹那に詠春さんが話し掛けます。

「お引き受けする前にお聞きしたいのですが、娘さんは裏の世界についてどれ程御存知なのですか？」

知ってますが、敢えて聞きます。

「娘はそれについて、全く知りません。
出来れば一生、裏の事に関わって欲しくはないのです。」

「無理ですね。現在、日本の東西裏世界を取り仕切る近衛家の直系
が無関係で居られる筈が有りません。

遅かれ早かれ巻き込まれるのは目に見えています。

護衛役としては、危険な立場に居る事の自覚の無い護衛対象程、厄
介なのは御理解して頂けると思います。

知らずに自分から危険に近寄ったりして
寧ろ知らない方が危険ですよ。

娘さんを危険から遠ざけたいので有れば、何が危険かを理解させる
べきです。」

「……………」。

バツサリと斬りました。

詠春さんが押し黙ります。

自分でも無理難題なのは分かってはいるんでしょう。

刹那も黙ったままですね。

「それに僕は友達に隠し事をしたく有りません。」

えっ？

転生者つてのは隠し事じゃないのかって？

聞かれたら教えますよ？

輪廻転生、別に大した事じゃないですからね。

「……ですが、今の時期から何かに怯えながら生きるというのも不幸というもの。」

せめて、十歳迄は裏の世界は秘密に。

その間に何か事件が起きれば、その限りに有らずという事で宜しければ、

我等二人、近衛木乃香様の護衛役、お引き受け致します。」

「……ふう……参りました、刹羅君。」

既に娘の名を御存知でしたか。」

そう言えば、木乃香ちゃんの名前を言ってますでしたね。

詠春さんはそう言うと、平身低頭して。

「刹羅君、刹那君。」

我が娘、木乃香の事を宜しくお願いします。」

「謹んでお受け致します。」

詠春さんの言葉に、僕も同じ様に頭を下げて応える。

「えっ？えっ？あ…兄上？詠春様？」

刹那が僕と詠春さんをキョロキョロ見ています。
話しに付いて来れていなかった様です。

後に六人目のバカレンジャーにさせない為にも刹那の頭も鍛えねば
！！

「（！？…急に悪寒が！？）」

詠春さんに案内されて、庭へ行きます。

テーンテーン

広い庭で、女の子が一人で手鞠で遊んでいます。木乃香ちゃんです
ね。

「と〜んと〜んとまのて〜んぐさん」

カット、NG。

何故、トンマ天狗？

TAKE2、アクション！（カチン）

テーンテーン

「てゝんてゝんてゝんまり」

「（い…今、何かおかしい流れがあつた様な気が？）木乃香」

木乃香ちゃんに詠春さんが話し掛けます。

「あつ、お父様。どないしたん？」

「今日は木乃香に会わせたい子達がいまして。此方の二人です。」

木乃香ちゃんの前に出ます。

刹那は黒目黒髪に変装してますが
僕は赤目白髪のままです。

この姿に誇りを持っていますからね。

「（…うわ、魔力量が今の僕よりも上ですよ。半端じゃないですね。」

」
初めまして、桜咲刹羅です。」

ただ漏らしの魔力に内心驚きながら御挨拶。

「あ…。は、初めまして。双子の妹の刹那です。」

刹那も木乃香ちゃんの魔力に吃驚ですね。

「ウチは、このかやゝ。なあ？

双子やのに何で、目とか髪の毛の色が違うん？」

「本当は刹那も僕と一緒にですよ。
目立つのが苦手で変装しているんです。」

「ちよつ…！？兄上！！」

あっさり変装だとバラしました。

「そうなん？

勿体無いわ、かつこええのに？」

「そ…そんな事は…。」

「二人は、木乃香と同じ年です。」

木乃香の友達になってくれるそうですよ。」

「ほんまなん!?!」

満面の笑顔です。それだけ、一人で遊んでいて寂しかったんでしょ。

「勿論です。よろしくね、このちゃん♪」

思わず、このちゃんと呼んでしまった。

「兄上。そんな呼び方は……。」

「えへへ、このちゃんやて〜
めっちゃ嬉しいわ♪」

ウチな、友達出来たら絶対そう呼んでもらおう思ってたんや〜♪」

このちゃんがとっても喜んでるので、刹那も黙りました。

「なあ、二人の事は、せつくとせつちゃんて呼んでもええかな?」

「ええ、是非。」

「え?...あの?」

「せつくん♪」

「はい♪このちゃん♪」

「はい♪せつちゃん♪」

「…ええつと。こ…木乃香お嬢様。」

「むっ！

せつちゃんも、ウチの事、このちゃんて呼んでやっ？」

「頑張れ、せつちゃん♪」

刹那に向けてサムズアップ。

「あ…兄上えっ！？」

刹那に逃げ場無し！

「……………このちゃん。」

刹那、覚悟完了しました！

「せつちゃん」

えへへ、もつと大きく呼んでくれへん？」

「…こ、このちゃん」

真つ赤な顔で言いました。

刹那も本当は友達が出来ることが嬉しいみたいです。

「はい」

せつちゃん、ありがとーな」

「ど…どういたしまして。」

「遊びましょう、このちゃん」刹那」

「うん、せつくん」

「えっと…何して遊びましょう？」

「せやな、この鞠回して遊ぼや？」

「異議無し」

「わ…私も。」

（詠春サイド）

まさか、娘と同年の少年に
論破されるとは思いませんでした。

彼は唯の賢い子どもなどでは有りませんね。

彼の言葉は、正論です。

無理難題だという事は、私自身も分かってはいたのですが…。

それでも、彼は条件付きとは言え
此方の意を汲んでくれました。

「十歳。確かに、その歳になれば自分で色々と判断が出来ますね。」

ナギも、十歳で外の世界に出ましたからね。

『兄上、いきますえ』

『せっくん、こっちや』

『このちゃん、はい』

木乃香が刹羅君と刹那君と仲良く遊んでいます。
刹那君は、最初は戸惑っていたみたいですけど、今はすっかり楽しんでますね。

「……あんなに楽しそうな木乃香を見たのは初めてかも知れませんがね。」

……那羅、刹子さん。

「……あの子達に感謝します。」

〈詠春サイド・アウト〉

〈刹那サイド〉

……兄上と詠春様の会話は良う分からんうちに終わってしもうた。

兄上が、簡単に言つと詠春様の娘さんと仲良うしながら守ったげ
んやつて話しゃ。

お庭に行くと、女の子が一人で寂しそうに鞠つきしとつた。
。

その子がウチの守る相手、木乃香お嬢様…やなくて、このちゃんや
つてん。

詠春様に、兄上と一緒にこのちゃんに会わせてもろた時に、このち
ゃんから物凄い力を感じたんには吃驚やつた。

このちゃんへの挨拶の時に

ウチらの正体とかの話は秘密や言うのに

兄上は髪も目も全然気にせんと素のまんまで。

ウチはあかん思て、髪と目の色を変えてたんやけど、兄上があつさ
り教えよつた！信じられへんわ！

このちゃんは“かつこええ”って言うてくれたけど、きつと兄上や
から似合つんやろな。

霞さんの場合は“色違いなんか気にすんな”やったな。

このちゃんに対して兄上が何やか馴れ馴れし過ぎて怒られんか心配
やつたけど、このちゃん嬉しかったようや。

ウチも押し切られてしもうた。

そんで三人で遊んだんやけど、あんなに兄上とも一緒に楽しく遊ん

だんは、初めてやった。

ウチは、このちゃんに会わせてくれた詠春様と、
あんな時間を与えてくれたこのちゃんに感謝しとるんや。

今まで兄上に守られっ放しやったけど

強うなって今度は、ウチがこのちゃんを守るんや!!

「安心してな、このちゃん。」

く刹那サイド・アウトく

く木乃香サイドく

今日な、ウチに初めて友達が出来たんや♪

しかも二人もや♪

お父様が連れて来てくれた、かつこええ男の子と女の子。せつくん
とせつちゃんや♪

二人は双子や言うつったわ♪

せつくんは綺麗な赤い目と白い髪の毛しとってな、せつちゃんも同

じやのに変装しとるんやて。かつこええのにな。

せつくんは、ウチの事を初めて呼ぶ時に、このちゃんて呼んでくれたんや。うちに友達が出来たら、そう呼んで欲しかったんや。せつちゃんも、ちよいと時間かかったけど、ちゃんと呼んでくれたえ。

あの後、三人で遊んでめっちゃ楽しかったわ。

これから、もっといっぱい遊ぼうな。

「お父様、ありがとーな。」

第二話『近衛木乃香』（後書き）

身も蓋もなく言えば、刹羅と刹那が木乃香と仲良しになりました。

第三話『謎の巫女』（前書き）

お気に入り登録件数が、50件以上!?

ありがとうございます!!

第三話『謎の巫女』

桜咲刹羅（8歳）ですが何か？

何と>神鳴流<を三年足らずで完全習得しました。>斬魔剣・弐の太刀<も出来ます。

ですが、どうも僕は>雷<より>火<や>風<の方が扱いやすいみたいです。

なので、>紅蓮拳<の剣バージョン>紅蓮剣<触れた花弁が火と燃える>百花繚乱・朱麗炎<ごっつい>斬鉄閃<に風と火を合わせて>雷の暴風<ならぬ、炎の暴風>紅牙烈風<つてのを創ってみました。

これには師範も呆れてましたね。

詠春様（さんから、様に変えました。

長だと間違えてオッサンて呼びそうです）にも目出たく『バグキャラ』認定されました。

現在、突撃攻撃>ゴッド・フェニックス<と

遠距離攻撃>カイザー・フェニックス<を

練習中ですが、炎を>火の鳥<の形にするのが難しいです。

「せつくん、せつちゃん、外行こ」

「はい、このちゃん」

木乃香ちゃんが遊びに誘うと、刹那が元氣良く答えました。
刹那もすっかり馴染みましたね。

…ですが。

「刹那、学校の宿題はどうしました？」

「……………」

スッと目を反らしました。

「やってないんですね？」

「あゝ、せつちゃんあかんえ？
うちとせつくんで教えたるから
終わってから遊ぼうな？」

「やりましょう、刹那。

選ばれしバカの戦士にならない為に！」

「何やそれ！？」

そんなこんなで刹那の宿題を終わらせました。
良く頑張った刹那の頭を撫でます。

「偉いですよ、刹那。」

「あ…兄上。」

僕は褒めて伸ばすタイプです。

「あ〜ん、せつちゃんええな〜。」

「このちゃんも手伝ってくれてありがとうございます。」

木乃香ちゃんの頭も撫でます。

「えへへへ、どういたしましてや〜。」

「さて、では遊びに行きますか。」

「せつくん、先に行つとるえ〜?。」

「兄上、お先に失礼を!!。」

木乃香ちゃんと刹那が待ちかねたように
一足先に外に向かいました。

僕も少し遅れて門へと向かいます。

門に着くと、二人の他に巫女さんが一人居ます。

「どうしました？」

「あつ、兄上。」

「せつくん、この人も一緒に外に行きたいんやっで。構へんかな？」

「はあ、構いせんが？」

「ありがとうございます。」

ほな、御一緒させて頂きますわ。」

「綺麗な川やっ」

「本当やわ、このちゃん」

河原に来ました。周りに草村もありますね。

木乃香ちゃんと刹那が、川に近寄ります。

これはひょっとして、川イベントでしょうか？

「お二人さん、水ん中に落ちんよう、気いつけなはれ？」

「はい。」

巫女さんの声で川から離れました。

「どうも、御世話をお掛けします。」

「いえいえ。」

ガサガサ

草村の一部が揺れ動きました。

「このちゃん！」

「ほえ？」

刹那が木乃香ちゃんを庇うように前に立つと、草村から黒い犬が現れました。

「クーン。」

「子犬ですよ、刹那。」

「……何や。」

刹那が安心して脱力しました。

木乃香ちゃんと刹那が、子犬に近寄り撫で回します。

子犬も嬉しそうです。

「この子、かわええな。」

「首輪も無いし、野良やるか？」

「どうなんやろ？そうや、せつちゃん
さっきは守ってくれてありがとうな。」

「み…身に余る光栄です。」

この後、子犬も一緒になって遊び、時刻は既に夕暮れです。

「皆さん、そろそろ帰りましょう。」

「そやね、せつくん。」

「はい、兄上。」

「——オンバサラソワカ！」

いきなり巫女さんが呪符を懐から取り出して呪文を唱えて地に貼ると
足下に光が蜘蛛の巣の様に広がり
体が何かに縛られた様に動けません。

「へ？」

「なっ！？

か…体が動かへん！？」

「く…不覚！！」

「>不動金縛り<の呪符どす。
お嬢様、失礼致しますえ。」

そう言うと、巫女さんは

木乃香ちゃんに近寄り

木乃香ちゃんの額に人差し指を当て

くたつと倒れ込んだ木乃香ちゃんを抱える。

「こ…このちゃんに何したんや!？」

「…少し、眠って貰っただけです。」

「……貴女は何者ですか？」

巫女さんの正体を尋ねると、懷から眼鏡を取り出して顔に掛ける。

「ウチの名は――天ヶ崎千草くどす。

木乃香お嬢様は、頂いて行きますえ。」

巫女さん…天ヶ崎千草は、そう言つと

転移符を使い、木乃香ちゃんを連れ去つた。

「兄上え…このちゃんが…このちゃんがあ…。」

刹那が泣いています。

「分かっています。

このちゃんを助けましょう。」

「霸ッ!!」

パアアアアアアン!

気合いで、金縛りを破りました。

「え? 兄上?」

刹那が呆気にとられてますね。

地面に貼られた呪符を破り、金縛りを消します。

「大丈夫ですか、刹那?」

「は…はい!」

「このまま、このちゃんを助けに行きますよ!」

「で…でも、何処に連れて行かれたのか分からへんし…。」

久しぶりに精霊に聞きま——

「ワンッ!」

子犬が声を上げました。

僕達に付いて来いと言っているみたいですね。

「案内してくれるのですか？」

「ワン。」

「ありがとうございます。
お願いします。」

「…兄上は、犬の言葉が分かるのですか？」

「いえ、この子が賢いんです。」

「ワウ！」

子犬が駆け出し、後に続きます。

意外に速いですね。

それにしても驚きました。

まさか此处で、天ヶ崎千草が事件を起こすとは。

第三話『謎の巫女』（後書き）

どうしましょ？

第四話『刹那飛翔』（前書き）

お待たせしました。駄文ですがどうかお許しを。

書くのが遅くなってる間に、お気に入り登録件数が、101（ワンゼロワン）。

バビル二世ですよ！

第四話『刹那飛翔』

子犬に案内されて、刹那と一緒に大自然の中を突っ走り、木乃香ちゃんを攫って行った千草さんの居場所に向かっています。

向かっている方向に、巫女と女の子を抱えたデカい猿が居ます。

見つけました。原作の岩場です。

「そこまでだ、木乃香お嬢様を離せ!!」

「千草さん、このちゃんを返して下さい。」

「な…何やつ!？」

あんたら、金縛りはどないしたんや!？」

「力ずくで破りました。」

「んなアホな!？」

「観念しろ、天ヶ崎千草!

既に、貴様の所業は、兄上が総本山に伝えた!

直に、応援が駆けつけるて来るぞ!」

刹那が千草さんに竹刀を向けて、投降を呼び掛けます。

総本山には、僕の式神>ちびせつらくを飛ばして報告しました。

総本山の結界をも天元突破する優れものです。

「フン…お断りや！」

折角や、あんたらに、お嬢様の力の一端を見せたるわ。」

千草さんが、そう言って木乃香ちゃんに符を貼り付ける。木乃香ちゃんの体が、ピクンと反応し光を発すると、千草さんが真言を唱える。

「集いし星が、新たな力を…。」

「違うでしょ!?!」

まさか此処でボケるとは！

「オンキリキリヴァジュラウンハッタ。」

千草さんがやり直して、>鬼神衆くを召喚しました。

原作で召喚されてた妖^{あやかし}の方々です。

「何や何や？

久々に呼ばれた思ったら……。」

「相手は……。」

「> 斬空閃く。」

シャッ

ドシャ

横一閃、木刀を使つての抜刀術。
気を纏つた剣風が、喋つてた妖と
その近くに居た数体を斬りました。

「な…何やと!？」

「お前、話しの途中やっatarougが!？」

「どうでも良さそuna話でしたので。」

どうせ、ほぼ原作通りの会話の流れでしたでしょうし。

「千草さん、トリックスターのショータイムはここまです。
行きますよ刹那、一直線に斬り進み

木乃香お嬢様を取り返します。」

「はい、兄上!!」

「あ…生憎やけど、ウチにはまだメインイベントが控えとるんどすわ。」

そう言うと、千草さんと木乃香ちゃんを抱えた式神>猿鬼<が浮遊術で浮かび上がりました。

「空中で僕達から逃げられると…。」

「…せつくん、せつちゃん？」

「兄上、あかん!!」

このタイミングで、今まで眠っていた木乃香ちゃんの目が覚め、翼を出そうとしていた僕を刹那が制止しました。

「あんさんら、相手はまだガキやし殺さんようにとだけ言うとかわほな。」

千草さんは、妖達にそう言って飛び去って行きました。

「あ…。」

刹那が沈んだ表情をしています。

「刹那、落ち込んでないで、
先ずは目の前の状況を片付けましょう。」

「……はい。」

刹那が、竹刀の柄を強く握り締める。

「…> 京都神鳴流・桜咲刹那く、いざ参る!!」

刹那が名乗りを上げて敵に突撃する。

「勇ましいのう!ぬん!!」

「> 斬岩剣く!!」

一つ目鬼の一人の棍棒と、刹那の竹刀が交差する。

竹刀が棍棒を真つ二つに斬った。

「うおっ！？」

「もう一発！！」

続けざまの>斬岩剣くで相手を斬り捨てる。

刹那は、更に敵を斬り伏せていく。

だが、隙をついた敵が、刹那を狙って攻撃を繰り出そうとする。

「しまっ…！？」

「アオオオオオオン！！」

突如、今まで空気だった子犬が、雄叫びを上げ、刹那を狙った敵に飛びかかる。

爪先を軸に体を前方に高速回転させ
遠心力によって威力を増した牙が
敵の首を刎ね飛ばした。

「あれは、>絶・天狼抜刀牙く！？」

子犬が繰り出した必殺技に吃驚しました。

更に子犬は、今度は>影分身の術<で三体になり敵を咬み倒すと、刹那の背後を守るように立つ。

「……凄いな。ありがとうな！」

「ワン。」

刹那のお礼に、子犬が一声鳴いて応える。

此处で、刹那と子犬がタツグを結成。

刹那の竹刀が敵を斬り裂き、子犬の影が槍となり敵を貫く。

あつ、僕もちゃんと戦ってますよ？

強そうなのを主にに相手にしています。

結構片付けたんですが、まだまだ敵の数が多いですね。

『放てえええっ！！』

そんな事を考えていると、

突如、詠春様の声が響き、矢の雨が妖達に向かって降り注いだ。

「なななな何や!？」

「矢だ!!」

「やーねー!!」

慌てふためく妖達を矢が射抜く。

何か呑気なのも居るみたいですが、気にしない方向で。

「皆の者、行くぞ!!」

大雑刀を持った、長い黒髪を刹那と似た様な髪型にした一人の巫女の号令一下、
巫女衆が、それぞれ穂先の違う長物や普通の剣を掲げ、戦場を駆ける。

「突撃!粉砕!勝利なのだ!!」

「総本山の昇り竜の槍を受けて見よ!!」

「あたし達も行くぞ!!」

「うん、姉様!!」

「“普通”って言うな!!」

「…………お腹減った。」

巫女無双。

……まさか、彼女達を相手に、奥さんに言えない様な事はしていませんよね、詠春様？

「（していませんよ！？

そんな真似したら死ぬ！！）」

ここは私達に任せて、刹羅君達は

木乃香を取り戻しに向かって下さい！」

詠春様が、作戦を伝えます。

「天ヶ崎千草の目的は、この先にある祭壇の大岩に封印されている
>鬼神くを

木乃香の力を媒介に復活させるつもりでしょう。

ならば、その前に木乃香を奪取してしまえば、彼女は目的を果たせなくなります。」

原作の、一撃離脱作戦です。

「了解しました。行きますよ刹那？」

僕は、背の白い翼を展開する。

「あ…兄上、掟が！？」

此処まで来て、まだ躊躇いますか……。

「いい加減にしないで！！

大切な者を助けたいなら、そんなものに拘って如何します！！

そもそも、鳥族の掟など純血種ではない僕達には関係有りません！

！」

「なっ！？」

思わず、怒鳴ってしまった。

「……せ…せやけど、本当の姿を見られたら、嫌われるかも知れへんし。」

「それならそれでも良いじゃないですか。

偽りの姿で、友達を欺いて過ごすより余程良い。

……まあ、このちゃんの場合、刹那の本当の姿を見たら『天使みたいやな』とか言いそうですけどね。」

「ふえっ！？」

「嫌われるか、受け入れてくれるか。

先ず、このちゃんを助け出さない事には始まりません。

僕は、このちゃんを助けたい。

刹那は、このちゃんを助けたいですか？」

「も、勿論や！！」

「ならば、全力を尽くしましょう。」

「分かったわ、もう迷わん！！

もし嫌われても構わへん！！

ウチは、このちゃんを助ける！！！」

僕の後ろに続いて、覚悟を決めた刹那が純白の翼を広げ飛翔する。

向かう先は、古の大鬼神が眠る祭壇。

第四話『刹那飛翔』（後書き）

てきとー巫女衆名前設定

関 せき
愛 あい

益徳 ますとく
鈴 りん

星 ほし
竜子 りゅうこ

錦 にしき
翠 みどり

錦 にしき
蒲公英 たんぽぽ

白馬 はくば
蓮 れん

神武 かみたけ
恋 こい

矢を射つてた名無し巫女数人

第五話『神の力』（前書き）

上手く話がまとまっとらん…いや、大丈夫。

…たぶん、きっと、おそらく、メイビー？

第五話『神の力』

く天ヶ崎千草の過去く

『千草ちゃん、良く見てや？』

『わゝゝ』

すごいわ、お母様く！』

母親の掌の上で、折り紙の“やつこさん”がクルクル回る。

それを見て無邪気に喜ぶ千草。

『うふふ、千草ちゃんも練習したら出来る様になりますえ。』

『ホンマに！？』

どうやるんか教えてやゝ！』

『勿論、教えたりしますわゝ』

月日が経ち。

『見ててや、お父様！お母様！』

千草は、折り紙のやつこさんを
掌の上で回す事が出来る様になった。

『上手よ、千草ちゃん♪』

『ああ、上手いもんだ!』

『えへへ♪』

家族三人は、笑顔で過ごしていた。

更に月日が経ち。

『千草、俺達は仕事で暫くの間、留守になる。その間、千草は協会
に預かって貰う。』

『…うん。』

『…千草ちゃん、ごめんなさい。』

『…すまん、千草。』

『二人が悪い訳や無いし、謝らんといて。』

『ありがとう、千草ちゃん。』

『行く前に、俺達から千草へ贈り物が有るんや。』

『贈り物?』

『>式神<よ。』

『そつや、俺からは>猿鬼<。』

『ウチからは、>熊鬼<や。』

二人が、ファンシーな式神を召喚する。

『…可愛え。』

『どっちもウチらが、千草ちゃんの為に作り上げた式神や。』

『俺達の、千草への愛情をたっぷりと込めたから、とっても強いで
!』

二体の式神>猿鬼<と>熊鬼<が、千草の側に寄って、それぞれ一
声鳴く。

『あは、どっちも“よろしく”やて。

こっちこそ、よろしくや。』

二体は符となり、千草がそれを受け取る。

『お父様、お母様、ありがとうございます。』

千草が、両親にきちんとお礼を言う。

次の日に任務へついった千草の両親は、帰って来る事は無かった。

そしてまた、月日が経ち。

〔関西呪術協会・陰陽寮〕

『天ヶ崎千草、鬼蜘蛛くを降した功績を認め、総本山への入山を認めるものとする。』

『謹んで承ります。』

湖面に浮かぶ祭壇に置かれた台座の上に
横たわる>供物・近衛木乃香<。その傍らに立つ>祭司・天ヶ崎千
草<。

千草が祭壇の向こうに起立する大岩を指差す。

「あつちに見える大岩にはな、危な過ぎて今や誰も召還出来ひんゆ
ー巨軀の大鬼が眠つとる。

十年以上前に一度暴れた時には、今の長とサウザンドマスターが封
じたらしいけどな。

でもそれも…お嬢様の力があれば制御可能や。」

「…そんなに何する気なん？」

「…復讐や。」

「どうゆう事？」

「お嬢様には、知らされとらんけど

世の中には、>魔法使い<云うんがたくさん居んねん。

そういったもん達の住まう、>魔法世界<云うところで昔、大きな戦
争があつてな

ウチの両親もそれに参加して命を落としてもうた。

天涯孤独となったウチは、>関西呪術協会<の支部の一つに引き取
られ、陰陽師とし研鑽を積み、お嬢様の御実家でもある総本山に上
がった。

……ここら辺は、余り関係ないわ。

日本には、東の方に西洋魔術師の拠点があつてな、お嬢様の爺様が治めとるんやけど、西と東で仲悪う争つとる。

長同士は仲良うしたい様やけど、今までの歴史がそれを許さんのや。そう言つた、魔法使い同士の争い事は
今も世界中で、続いとる。

このまま争い続けてウチみたいなのが增える位なら、………いつそのこと、世界から魔法使いを消滅させたる！！

ウチの仇は、“魔法そのものや”！！

その為には、力が要る！！

その力が目の前に有る！！

ウチは、それを手に入れる！！！！」

千草は、何時の間にか拳を握り締めて叫んでいた事に気付いて、ゆつくりと落ち着きを取り戻す。

「…例え外道と呼ばれ、地獄に墜ちようとも、ウチの目的を成し遂げる為に、お嬢様の力が必要なんや。」

千草が呪符で木乃香の口を塞ぎ、祝詞を申し述べると、木乃香の体から金色の光の柱が立ち上る。

それに呼応し、大岩が揺れ動き湖が荒れ狂う。

大岩からも光柱が立ち上り、その中から両面四つ手の巨大な鬼が姿を現す。

千草が祝詞を申し述べ終わると光柱は消え去る。

今此処に、飛騨の大鬼神＞両面宿儺くが復活した。

「我が名は＞両面宿儺く也。

私を呼び起こしたのは貴様か？」

まさか、会話が成立するとは思っていなかった千草が驚く。

「…是に御座います。

私めは、天ヶ崎千草と申します。

此方に捧げられしは、近衛木乃香なる神子に御座います。
両面宿儺様の御力を賜りたく……。」

『———＞真・雷光剣く！！』

突如、雷が宿儺を襲う。

「刹羅サイド」

刹羅達が祭壇に辿り着くと、既に両面宿儺は姿を現していた。

「…少し遅かったみたいですね。」

刹那が無言で顔色が青いです。

「しっかりしなさい刹那。」

今から僕が、あの鬼神に攻撃を仕掛けますから、刹那は隙を見てこのちゃんを助け出して下さい。」

「あ…兄上、そんな無茶や!？」

「僕を誰だと思っているんです？」

僕は刹那を信じていますから、刹那も僕を信じて下さい。」

そう言って、一気に接近する。

「>真・雷光剣く!!」

刹羅が木刀の剣先に溜めた雷を、両面宿儺へ振り下ろす。

「ぬううん!!」

その雷を、両面宿儺は気合いで吹き飛ばした。

「何っ!?!」

「ふん!その程度の雷など通じん!以前、より強烈な雷を受けたからな!!」

「(…詠春様とサウザンドマスターの雷撃か?)」

「それより小僧、名を名乗れ!!」

「……>京都神鳴流<桜咲刹羅。」

「今度は、此方から行くぞ刹羅!!」

両面宿儺はそう言つと、片面に一振りの神気の大剣を生み出して、その手に握る。

「喰らえ!!」

「ちいつ!!」

刹羅が両面宿儺の袈裟斬りの光刃を避ける。

更に繰り出される両面宿儺の連撃を刹羅は避け続ける。

両面宿儺の激しい動きが、湖水を巻き上げ霧と化す。

「隙有り！」

「え？…ぐっ！？」

霧の中に紛れた刹那が、千草に接近して吹き飛ばして、素早く木乃香の拘束を解き離脱する。

「お嬢様！お嬢様！御無事ですか！？」

「ああ…せつちゃん。」

「お嬢様、どこか痛い所は！？」

「うん、大丈夫や。」

あれ…せつちゃん、その背中のは？」

「えっ！…あ…こ…これは…。」

「綺麗な羽根…なんや天使みたいやな」

「（あはは、兄上が言った通りや）」

「（…雷撃が通用しないと、違う属性で戦うしか有りませんね。）

…>火<は>風<を生み、>風<は>火<を強める——>紅牙烈風<!!」

「うおおっ!？」

炎を纏った烈風が、両面宿儺を押し退ける。

「…やるではないか！」

「そろそろ私も参戦させて貰うぞ！」

両面宿儺が反転し、もう片面が神気の弓矢を放つ。

「くっ!——>紅牙烈風<!!」

二度目の>紅牙烈風くで相殺を狙う。
しかし、一度目と違い

とつさに撃った為に気の練りが甘く
相殺しきれず、神気の矢が迫る。

間近まで矢が迫った瞬間、刹羅の意識が途切れた。

両面宿儻が撃った矢は、刹羅に当たる瞬間、ピラミッド状の>結界
くによって阻まれた。

「何だと!？」

本来、独鈷を用いて不動明王の真言を唱える事によって展開する防
御結界。

それを自力で展開した刹羅の額に、不動明王の金色の梵字が浮かぶ
赤い>チャクラくが現れていた。

「貴様、いったい何者だ!？」

刹羅は答えない。

「おい、答える!!」

「む?...どうやら、意識が飛んでいる様だぞ？」
□

無我の境地。

刹羅は己の意識無く、ただあるがまま最適に動く。

刹羅が、背の翼を大きく展開し、月光を取り込み、力へと変換する。

「右手に>気<、左手に>魔力<、天（額）に>神力<。
三種合成——>神化^{かんか}法<!!」

刹羅の体は金色、翼は赤い光を纏う。

其の姿、三毒を喰らい尽くす金翅鳥。
不動明王の背を守る伝説の火の鳥。

「...何、>迦楼羅<だと!？」

「信じられん!!」

火の鳥と化した刹羅が、一度宙返りをし

両面宿儻に向かって行く。

「負けるか!!」

両面宿儻の二つの口が同じ言葉を同時に発すると、神弓にもう片面が持つ大剣を矢として構える。

「一発必中!!!」

両面宿儻が撃ち放った大剣の矢が刹羅に向かい飛んで行く。

刹羅と大剣が、空中で激突し、爆炎を巻き起こした。

「やったか!？」

「むっ…いや、あれは!？」

爆炎の中から火の鳥が姿を現し、そのまま両面宿儻にぶち当たり、突き抜ける。

「うわあああああ!!!」

刹羅の>迦楼羅焰くが、両面宿儺を覆い
巨軀の大鬼の姿を焼き尽くした。

「……………うつ。」

だが、刹羅も力を使い果たし湖に墜ちた。

第五話『神の力』（後書き）

刹那の木乃香救出シーン、あっさりし過ぎ！

千草はあれで気絶です。

式神ーズと戦わせるつもりだったんだけどな？

どうしてこうなった？

まあ、優先目的を成し遂げたって事で。

いやもうマジにアドバイスをお願いします！

第六話『少女の祈り』（前書き）

駄文です。読む方は、お薬の用意をどうぞ。

ちよつと場面転換が多いかな？

第六話『少女の祈り』

湖の岸边に降りた刹那と木乃香は、鬼神を倒した後に湖の中へと墜ちた刹羅の姿を見た。

「…あ、兄上!？」

「せつちゃん!

早よ、せつくん助けんと!」

「はっ!

お嬢様、此処でお待ち下さい!」

木乃香を残し、刹那が飛び立つ。

「…せつちゃん、お嬢様はやめてや。」

苦笑しながらそう言うと、目を閉じ両手を合わせて祈る。

「……神様、ウチの大切な人が無事で有りますように。」

祈る木乃香の体が、微かに光を纏う。

「刹羅君と両面宿儺の>気が消えた!!
まさか、相打ちか!？」

詠春の言葉が聞こえ、巫女達に怒りの炎が宿る。

「よくも刹羅殿を!許さん!
我が魂魄を籠めた一撃、受けてみよ!!」

斬撃が妖を斬り裂く。

「刹羅の仇だ!
我が白銀の豪撃、その身に受けて、ぶっ飛びやがれ!!」

豪撃が妖を斬り飛ばす。

「俺らがやったんちゃうで!？」

「む…向こうの片が付いたんなら還りたいんやけど？」

「はいはいはいはいいいいい！！
…ただの八つ当たりだ、気にするな？」

「もう少し此処に居るのだ！
うりやりやりやりやあああ！！！」

連撃が妖を斬り刻む。

『り…理不尽だああああ！！！』

妖達の絶叫が木霊する。

「……………刹羅、死んでない。」

「微かに>気くを感じるよ？」

「でも、かなり危ないんじゃないか？」

恋と蒲公英と蓮の会話を聞き、ピタッと動きを止める巫女衆。

「祭壇に急ぎ向かうぞ！」

「……え〜と？あつしらは？」

「還つてよし！」

『らじゃ！』

愛の言葉で妖達はそそくさと還つて行き
詠春と巫女衆は祭壇へと駆ける。

「…刹羅君て人気有るんですか？」

「掃除や料理などを手伝つてくれますので。」

「……刹羅の作る御飯、美味しい。」

「ひよつとして、最近料理の味が上がったのは刹羅君が原因！？」

「僅か八歳ながら、顔立ちも良く、白髪紅眼も美しく似合い、透き
通る様な白い肌、文武に秀で、器量も良く、家事もこなすと、欠点
が有りませんからな。」

「…何ですか、その完璧超人？」

「むしろ、完璧鳥人ですな。」

あの白い羽をモフモフしたい！」

「鈴は背中に乗って飛びたいのだ！」

「…妹の刹那君は？」

「素質は有るのですが未熟。武に偏っていて、刹羅殿も良く勉強を勧めています。」

「兄を尊敬しておりますが、劣等感も有る様ですな。」

「本来なら、あれ位が普通だよな？」

「そうだな！普通だ！

普通だとも！普通で悪くない！！
良し！今度、刹那と酒でも――。」

『呑むな！！！』

八歳と酒を呑み交わそうとする蓮に、全員がツツコミを入れる。

そんなこんなで、祭壇へと向かう一同。

「……………うく。」

祭壇の上で気を失っていた天ヶ崎千草が目を覚まし、辺りを見回す。

「ス…スクナが消えとる!？
どういう事や!？
ん?…アイツは?」

両面宿儺の姿が無い事に驚くと共に、湖上を旋回する刹那を確認する。

「おい!あんた何しとんねん!？」

「む…天ヶ崎千草!？
あの大鬼なら兄上が倒したぞ!!」

「……あの子が、両面宿儺を倒した？」

刹那の言葉に衝撃を受ける千草。

「そ…それで、あんたは何しとんのや？」

「…兄上が湖に落ちたから探している。」

「なら、水ん中に入りや？」

「…ウチ、泳げへん。」

「あんた……アホやる?」

千草が溜め息混じりに言う。

「うるさい!

そんな事より、貴様まだやり合う気か!」

「…負けて見苦しい真似はせえへん。

……これ使い?」

千草が一枚の呪符を差し出す。

「…それは何だ?」

「水ん中でも呼吸が出来る御札や。」

「ほ…本当か!?

しかし、何故そんな物を差し出す!?」

「せめてもの罪滅ぼし……とは言わへんけど。

ウチのせいで、子供が溺死なんて寝覚めが悪いわ。」

「兄上は死なさへん!
その御札、借りるぞ!

……けど、礼は言わん！」

刹那が千草から呪符を受け取る。

「礼なんて期待してへん。早よ行き？」

……ウチは疲れたから休むわ。」

「ふん！……ゆつくり休んでいろ！」

そう言いながらの中に入って行く刹那の姿を千草は見送っていた。

「……ああ、そうさせてもらっわ。本当に疲れた。」

千草が祭壇に座り込み、一振りの懐刀を取り出す。

「……すいません、お父様、お母様。
仇を討つ事は叶いませんでした。」

千草の頬に涙が走る。

「もう直ぐお側に……は、無理やな？
ウチは地獄行きや。」

自嘲しながら懷刀を鞘から抜く。

「……あの娘に、お嬢様への詫びの伝言頼むんやっとな。」

目を瞑り、空を仰ぎ、刀の切っ先を喉へと向ける。

「……………!!」

刃を突き立てる為、千草は手に力を込めた。

バシン

「くぁ!…な…何や!？」

天ヶ崎千草が、その手に持った刃で己を刺し貫こうとした時、千草の影から現れた一つの黒い塊が飛び掛かり、その刀を弾き飛ばした。

塊の正体は、黒い子犬。

「……あんたか。何で邪魔したんや？」

「死んだらあかんやろ？」

千草と子犬が人語で会話をする。

「……ウチが死んでも悲しむもんは居らん。」

「俺が悲しむわ！」

飯をくれたりしてくれた恩が返せなくなる！」

「……そんなもん、偶々あんたを見つけた

ウチの気紛れや。恩なんか感じんでも良えんや……“小太郎”。」

小太郎と呼ばれた子犬が、小さな少年の姿に変わる。

「気紛れでも何でも、千草姉ちゃんは

狗族の里から抜け出して行き倒れとった俺を救ってくれた恩人や！！
勝手に死ぬんは許さへん！！」

小太郎が千草に詰め寄る。

「……千草姉ちゃんは、こんなんでも満足してるんか？」

「満足？……満足かやて？」

「……そんな……しとる訳無いやろ！！」

「親殺されて！！一人になつて！！」

「たくさん人を傷つけて！！」

「親の仇も討てんと、生き恥晒して！！」

「……ウチの人生、いったい何やねん！？」

千草は、何時の間にか嗚咽していた。

その時、湖面が僅かに輝きを放ち始めた。

「兄上……何処に居るんや！？」

水中呼吸の呪符を体に貼り、湖の中へと潜った刹那は刹羅の気を探るのだが、

湖に残る刹羅と両面宿儺の神気が入り乱れており、未熟な今の刹那

では刹羅の居場所を感知出来ない。

脳裏に浮かぶは、一緒に生まれ、自分を守ってくれていた兄の姿。
自信を持てない自分を叱咤激励する言葉。

「兄上…ウチ頑張るから。
お願いや…一人にしないで。」

刹那の流す涙が湖水に混ざる。

「……おい、娘。」

「念話！？…だ、誰や！？」

突如、頭に聞こえた女性の声に訝しむ刹那。

「誰でも良からう？
それより、刹羅の居場所に案内してやる。」

一条の光が、湖上より差し込む。

「刹羅は、この光の先に居る。」

「……！」

その言葉を信じ、刹那は光の導く先に向かう。

「木乃香、無事で……木乃香!？」

此処まで辿り着いた詠春は、木乃香の姿を確認した。

岸辺で、光を纏い一心不乱に祈り続ける木乃香。

その光が徐々に輝き増して行き、それに呼応するかの様に、湖の光もまた輝きを増す。

「何や?…湖が光つとる?
千草姉ちゃん、これってどういう事や?」

「…そんなん、ウチにも分からんわ。」

その時、千草の懷から二枚の呪符が独りでに抜け出し、二体の式神が姿を見せる。

「え…猿鬼？…熊鬼？…何で勝手に？」

「…千草。」

「…千草ちゃん。」

千草の耳に懐かしい二つの声が届いた。

「その声…お父様とお母様！？」

「こ…このぬいぐるみたいなんが千草姉ちゃんの両親なんか！？」

「そんな訳有るかい！！」

「俺達は、この式神の姿を借りとるんや。俺達が作ったもんやから“念”が込められとる。」

「それでも、こうして千草ちゃんと話せるんは、木乃香お嬢様のおかげやね。」

お嬢様の力が、ウチらにまで影響を及ぼしとるんや。」

その言葉を聞いて、千草の顔が陰る。

「……ウチ……お嬢様に……酷い事したんや。」

「……知つとる。ちゃんと謝って償いや、千草ちゃん？」

熊鬼の姿を借りた母が、千草を抱き締める。

「……死んだらあかんえ？」

「……千草を残して死んだ俺達と言える事や無いかも知れんけどな。」

猿鬼の姿を借りた父が、頭を撫でる。

それは、幼き日に失った温もり。幻影なれど、在りし日の姿。

それを奪った者を許しては置けない。

「……二人を殺したんは誰？」

千草は二人に、そう尋ねた。

「…千草、俺達の復讐なんか考えんでも良え。」

「…ウチらが千草ちゃんに望むんは
幸せになって欲しい、ただそれだけや。」

「っ！…幸せって何や！？」

ウチが今まで生きて来たんは、二人の仇を討つためなのに！！」

ウチは何を言つとるんや…！？

喧嘩しとるみたいな態度とって！！
せっかく話が出来んのに…！！

「何が幸せかか？…やっぱ結婚やるか？」

「…そうやね、お父ちゃん！」

「……は？」

この二人は、何を言っとなねん？
けけけ…結婚て！？

彼氏も出来た事有らへんのに…。

「おい坊主！どうや、ウチの娘は？」

「へ？俺？」

今まで黙って見守っていた小太郎に、父親が話を振る。

「あら？可愛いお嬢さんやね、お父ちゃん？」

「年が違い過ぎるわ！！
小太郎は、まだ三歳や！！」

ほんまに、何を考えとなねん！？

「元気になった様やな、千草？」

「あ…。」

「ウチらは千草ちゃんの親やで？」

…ウチの事、理解してくれとんのやな。

突如、猿鬼と熊鬼から光の粒子が立ち上る。

「…もう、時間切れみたいやな？」

「ごめんね…千草ちゃん。」

「あ…そんな…待って!？」

「千草、本当に幸せになりや？」

「千草ちゃん、元気でね。」

猿鬼と熊鬼の姿は光の粒子と消え去り、二枚の呪符が宙に舞う。

千草は二枚の呪符を手に取り、胸に当てる。

「……ウチは。」

「なあ？」

千草姉ちゃんは、俺と結婚するんか？」

小太郎の言葉を聞いて、千草は床に突つ伏した。

その光景を見ている複数の人影があつた。

「見つけた…兄上！！」

刹那は、光が導く先に、淡い光に包まれた兄の姿を見つけた。

「刹羅は氣を失っている。時間が無い、早く救い出せ。」

刹羅を包む光が、徐々に消えて行く。

「兄上はウチを守る！！
うおおおおおおお！！！！」

ただ一つの目的の為に、無心で進む刹那の体が光を放つ。

刹那に流れる気と魔力が融合し、爆発的に刹那の力を押し上げ、刹那に急接近し、刹那の体を抱きかかえて水面に向かう。

「…>咸卦法くか。刹那の妹も、中々やるな！」

「フフ…そうだな、姉者。」

魔力の光を纏い、祈り続けていた木乃香。

だが、今までの疲労が溜まり、纏う光が弱くなって行く。

「もう止めなさい木乃香！！」

それでも、ひたすらに祈り続ける。

「長、天ヶ崎千草を拘束致しました。」

「現在、他一名と共に五重塔の中に入れてあります。」

「……御苦労。」

巫女達の報告に、詠春が労いの言葉を掛ける。

「……今はまだ。」

『とつたどおおおおおおおお!!!!』

詠春が何か言おうとした時、湖の中から刹羅を抱えた刹那が飛び出し、雄叫びを上げた。

それに反応して、木乃香が祈りを止めた。

刹那が木乃香のもとに降り立ち、刹羅をゆっくりと寝かせる。

「……………せつくん。」

木乃香が刹羅の顔を撫でる。

「お……お嬢様！」

兄上は氣を失っていますが…御無事です！」

「……良かった。」

せつちゃん…ありがとうな。

……せや…ウチの呼び方は、
このちゃんやろ？」

「…」このちゃん、ごめん。

……ウチ、なんか凄く疲れたから休むな？」

「…ウチもや。…お休み、せつちゃん。」

木乃香と刹那は、それぞれ刹羅の体の上に折り重なって眠りについた。

「…私は完全無視ですか？」

しかも、娘のこういう姿は父親として複雑なんですが…。」

「微笑ましいではござらぬか？」

……お主らもそうは思わぬか？」

「……フン！」

「……そうだな。」

竜子が、誰も居ない筈の湖の方へと話し掛けると声が聞こえ、湖面に残っていた光が収束し、大剣を携えた憮然とする巫女と弓矢を携えた微笑する巫女の姿を造り上げた。

「（何というナイス巫女！）…君達は何者だ？」

詠春が二人に正体を問う。

「私の名は、>春くだ！」

「私は妹の、>秋く！」

『私達は二人で一人の両面宿儺だ！！』

「何だと！？」

嘗て戦った時には大鬼の姿しか見ていない為、二人の正体に驚く詠春。

「お嬢様の御心に通じ…刹羅殿の救助に手を貸してくれた様ではないか？」

「フ…その子達が気に入ったのかも知れんな？」

竜子と秋が軽い口調で言い合う。

「…両面宿儺よ、その姿はどういう事ですか？」

詠春が疑問を投げる。

「刹羅が、私達に積み重なっていた負の心を浄化してくれたのでな。」

「

「こうして、千六百年振りに
本来の姿に戻ったのだ！

ふはははははは！体が軽いぞ！

という事で勝負しろ貴様！

今度は負けんぞ！！」

春が大剣を詠春に向けて勝負を挑む。

「それより、総本山うちに来ませんか？
美味しい料理を用意しますよ？」

「む！本当か！？」

「勿論です。」

「よし、御馳走になってやるぞ！
刹羅達是我々が運んでやろう！」

「フフ…姉者は可愛いな。」

こうして、全員が総本山に向かうのだった。

途中、春と巫女達とで、寝ている刹羅の取り合いなどでいがみ合いがあったが

総本山に到着した頃には、すっかり意気投合していた。

第六話『少女の祈り』（後書き）

何故、刹羅達の両親が降霊されないのか？

それは、繋がりを持つ媒介を持ってないから。

巫女衆や、春と秋の外見の説明が無かったな？

多分、想像つくだろ？

第七話『形見』（前書き）

またもや内容がムチャクチャ。

第七話『形見』

……誰かが、夢の中で話し掛けて来る。

あ……こんばんは。

不動明王のミカです。お久しぶりです。

不動明王でミカエルのミカちゃんですか？
本当にお久しぶりですね？

はい。実は、お伝えする事があって、
貴方の夢枕に立たせて貰っています。

伝える事？……何でしょうか？

……貴方の前世での死因は覚えていますか？

貴女が的から外したダーツの矢で額をスコンと射られたんですよ？

……その通りです。ごめんなさい。

前にも言いましたが、気にしないで下さい。本題をお願いします。

分かりました。

実は…細かい理由は省きますが、アレが原因で貴方に私の力が宿ってしまっていたんです。

不動明王の力がですか？

はい。貴方が＞無我<の状態になり、額の＞チャクラ<が開くと＞神力<を扱えます。

それで、＞迦楼羅焰<や＞四天結界<等を自在に使えます。

更に、＞天・地・人<

＞天<は＞神力<、＞地<は＞魔力<、＞人<は＞氣<、三つの力を一つに合わせる＞神化法<によって、＞神靈化<して火の鳥＞迦楼羅<の姿にもなるんです。

貴方はそれで両面宿儺さんを降したんです。

何…だと？…＞迦楼羅<ですか？

く…、練習していた＞ゴッド・フェニックス<や＞カイザー・フェニックス<を改名しなくては。

へう？…問題はそこなんですか？

僕にとっては重要な案件です。

いつそ、読者様から募集しようかな？

たぶん、誰も送ってこないと思います…。

……僕もそう思ふ。

空しくなつて来たんで話を戻します。

ミカちゃんの力は、お返しした方が良いですか？

いえ、そのままが良いですよ。

そうですね。では、有り難く……って、そう言えば両面宿儺を降したくんだりとか全く覚えて無いんですが？

あの時は、南雲先生>覚醒者<状態みたいな感じでしたから。

>神力<を自在に使いこなすには、もっと精神修行の必要が有ります。

極限状態からの暴走ですか。

東方流玄レベルに到るには、完璧な>クリア・マインド<を手に入れば良いんですね？

その通りですけど、到っても＜重水素原子核融合指弾＞とかは無理ですよ？

自分が爆心地になるんで、出来ても使いません。

あつ、でも＞陽子線対消滅粒子加速拳＜なら、＞神鳴流＜の＞雷＜で応用が利くかも知れません。

その技の詳細が不明です。

何処までリアバナタを引っ張る気ですか？

へう…ごめんなさい。

とりあえず、今回の用件はこれだけです。また何か有れば来ますね。

分かりました。

お忙しい中、ありがとうございます。

「……良く知ってる天井だ。」

刹羅です。

総本山の自室（刹那と共同）で目を覚ましました。

「ん？…兄上、お目覚めですか？」

「ああ……刹那、お早う。」

僕の弦きが、隣で寝ていて刹那を起こしたみたいです。

「はい、お早うございます……」

[illegible]

「によわあ!？」

刹那がいきなりシャウトしながら僕の胸に飛び込んで抱きついて来
ました。

「ううう……良かった、兄上が御無事でえ。」

刹那から涙が流れています。

「な……泣かないで下さい。」

「だってえ……。」

「……刹那、心配してくれたんですね？」

「うん……うん。」

「ありがとう。」

何度も頷く刹那の頭を撫でてあげました。

「せつちゃん!!」

せつくんが、起きたん!？」

木乃香ちゃんが刹那の声を聞いて部屋に入って来ました。

「……お嬢様、御無じ『てい!』でっ……!？」

木乃香ちゃんがトンカチツッコミを！？

「今のは、ウチを心配させた分と、ウチをちゃんと守ってくれへんかった分と、ウチの事を“お嬢様”言つた分を合わせたお仕置きや？」

「うう…ごめん、このちゃん。」

チュッ

「え？」

ええええええええええ！？

今度は頬にキスううう！？

「えへへへ♪」

今のは、ウチの為に頑張ってくれお礼や♪
ウチの初めてのキスやえ♪」

「あ…ありがとうございます。」

何故、か刹那が固ま、っています。

と、此处で今度、は鈴さんと翠さ、んが部屋に入っ、て来ました。

ああ…句読点がおかしい。

「刹羅が起きたのだ！」

「お！本当だぜ！」

…って、何で顔が赤いんだ刹羅？」

「フフフ…翠、鈴。

それはな、刹羅がお嬢様から……。」

次は竜子さんが来ました。

てか、覗いていたのか竜子さん！？

「…竜子さん？」

覗きの罰として、食材庫に入ってる貴女のメンマを滅ぼしますよ？」

「すいませんでしたあああー！！」

綺麗な土下座を見せてくれました。

料理の手伝いをしている内に、腕が上がって、厨房で結構な発言力

を持っています。

この後、描写はしませんが、ドンドン人がやって来て状況の説明を受けました。

僕は、丸二日寝ていた様です。

木乃香ちゃんと刹那も、丸一日眠っていたそうです。

おや？

「…見慣れない方々が居ますね？」

「む？私達が分からののか！？」

「姉者、この姿では分からんだろう？」

大体の予想はつきますが。

「おお、そうか！私の名は春だ！！」

「私は秋。春の妹だ。」

『私達は——』

「二人で一人の両面宿儺ですか？」

「あ…が…？」

「…良く分かったな？」

だが、出来れば最後まで言わせて欲しかったのだが？」

「すみません。相手の言う事を先回りするのが趣味なので。」

ジョセフです。

「そう言えば、偶にやりますね兄上？」

「そうなん？」

今迄、作中でそんな場面無かったから知らなかったわ。」

「木乃香、メタ発言は止めなさい。」

「あ、お父様。」

たった今、詠春様が部屋へ来ました。

「…詠春様。」

「刹羅君、目が覚めたのであれば正装して、一時間後に評議場迄来なさい。刹那君もです。」

『御意。』

―総本山・評議場―

場の中央辺りに、刹那と横並びに正座をしています。

上座には詠春様が座り、横に神鳴流師範、更に、巫女衆がズラリと並んでいます。

詠春様が徐に口を開く。

「桜咲刹羅、及び、桜咲刹那。」

『はっ！』

「君達は、護衛役の任にありながら、護衛対象を攫われるという失態を犯した。

今回は、実行犯の精神的甘さも有り無事に取り戻せたが、もし相手が冷酷非情だったなら、どのような事態になっていたか…。

何か申し開きは有るか？」

「否、詠春様の仰せの通りに御座います。申し訳無い事と存じ上げ

ます。」

「…同じく。力が足りなかった事をお詫び致します。」

僕と刹那が平身低頭する。

「君達には今回の件により、

一時、護衛の任から離れて修行に専念して貰う。

その間、君達が受け持つ護衛対象は、我が義父の下に預ける。」

「お待ち下さい！」

「関君、何か？」

「失礼ながら申し上げます！」

長の申し上げる義父とは、東側の長である、近衛近衛門殿の事で御座いましょう！

幾ら、木乃香お嬢様の祖父とは言え、対立する組織に預けるのは如何なものかと！」

「組織ではなく、近衛近衛門と言う一個人に預けるのです。」

「それで納得する筈がありません！」

「…そうですね。もう少し説明をする。星君、天ヶ崎千草をこれに…。」

「御意。」

竜子さんが千草さんを連れて来ました。

千草さんが刹那と反対側の僕の隣りに座り頭を下げる。

「天ヶ崎千草、面を上げよ。」

千草さんが、詠春様と正座で向かい合います。

「君が起こした今回の事件に手を貸した者は居るか？」

「いえ、居りません。」

「では、

本来、両面宿儺の封印場所も封印解除の方法も知るような立場では無い君が、何故それを知っていた？」

「それは…古文書を見つけて。」

「そんな物は存在しない。

知る方法は、口伝だけだ。」

周りがざわめく。

詠春様は、この事を先に取り調べていた様です。

「…関君、これで分かるか？」

「記憶の改竄…」

総本山内部の者が、何者かに利用されたと…？」

「うむ。」

しかも、医療班によれば、無理に解除しようとするれば精神が破壊されるとの事だ。

そして、天ヶ崎千草の復讐心など外部の者が知る筈が無い。」

「成る程、東にお嬢様を預ける事で

獅子心中の虫を炙り出すのですな？」

「そうだ。」

此処から先は他言無用。

関西の者達に今回の事件を教えて、動く者と動かない者を探る。

木乃香を利用したい者は、嫌でも動かざるを得ない。娘を囷に使う様で心苦しくはあるが、身内に手を出されて黙ってはいられん。

この事は、既に木乃香と妻に伝えてあります。」

「分かりました。

お嬢様が安心してお戻りになられる様、この大掃除に我々も全力を尽くします！」

愛さんの宣言に全員が頷いた。

「有難う。

行動の指示は、伏龍朱里君が出す。
君達はそれに従って貰う。」

「がんばりましゅ！

はわわ！？…噛んじやった。」

これで勝つる！…のか？

「……さて、刹羅君に刹那君。

先程のは信賞必罰の内、罰でした。

次に君達には、賞を与えます。

桜咲刹羅君、此方へ。」

「はっ！」

詠春様に呼ばれ、前に出る。

「桜咲刹羅、両面宿儺を降した武功を認め、見習いから卒業とし、

> 京都神鳴流正統剣士くとします。」

神鳴流の技こそは習得しましたが、身分は今まで見習いでした。

詠春様から、一振りの野太刀を授かりました。

「その剣は、> 忠勇義烈<の士であつた君達の父の愛刀、銘を>飛天<と言います。」

「飛天」仏教で有翼天人の事。

「……有難う御座います。
この剣に恥じぬ生き方を目指します。」

父の形見を手にして、元の座に戻りました。

「次、桜咲刹那君、此方へ。」

「はっ！」

「この度の働きに御礼を言います。君には此方を授けます。」

刹那のは、木箱に納められた上等な竹笛です。

「この笛は、> 迦陵頻伽<と謳われた君達の母が雅楽の際に使用していた笛です。」

「あ…有難う御座います！」

僕も刹那も、それぞれ形見の品を受け取りました。

「最後にもう一人。小太郎君、入りなさい。」

「おう！…じゃなくて御意や。」

「普段通りで構いませんよ。此方へ。」

小太郎が座に入り、そのまま詠春様のもとに近寄り、正座して礼をする。

「刹羅君は初めてでしたね。」

この少年は、小太郎君と言って、君達と一緒に居た子犬です。」

既に正体が知られている様です。

小太郎君が此方に向きを変える。

「狗族とのハーフの犬上小太郎や。」

「烏族のハーフ、桜咲刹羅です。」

互いに自己紹介をしました。

「狗神の状態で小太郎君が使っていた技はどうやって覚えたんですか？」

「小太郎で良えで？」

狗神言うたんは、兄ちゃんが初めてやで。

…巫女達だと子犬扱いでもみくちゃんにしてくるんや。

と…技やったな？ええで教えたる。

と言つても、我流や里のものの見様見真似の＞狗神使い＜や＞忍術＜や。」「

「そうですか。」「

「ああ、後は漫画に載つとつた技やな。」「

あの犬漫画がこの世界にあつたのか！？

「挨拶が済んだ様なので小太郎君、もう一度此方を向いて下さい。」「

詠春様の方へ向き直つた小太郎に、詠春様が木乃香ちゃんを助ける為、一役買った事への感謝の言葉を述べました。

「小太郎君にも御礼をせねば成りませんが、何か欲しいものとかは有りますか？」

「うゝん？そやな？」

小太郎が考え込んでいます。

「千草姉ちゃんかな？」

今の台詞で、未だ座に残っていた千草さんが真つ赤な顔で俯いています。

周りも生暖かい目で二人を見守っています。

「…お互いの気持ちがどうであれ、
流石に人間を褒美として与える訳には行きません。」

詠春様が苦笑しています。

「うゝん…ほかに欲しいもん無いで？」

「千草君は暫く拘留という形で庇護せねばなりません。
その間、君も神鳴流を修行しませんか？」

武術流派には強くなるためのプロセスが確立されています。
我流で強くなるには、とてつもない時間と経験とバグの様な才能が必要ですよ？」

ジャック・ラカンの事ですね？

「神鳴流って確か剣術流派やろ？
せつかくやけど、俺は拳で戦いたいんや。」

「フッフ、神鳴流は得物を選びません。
素手でも充分戦えますよ。」

「マジでか！？」

こうして、まさかの＞神鳴流拳士・犬上小太郎＜が爆誕する事となりました。

「詠春様。」

「何でしょうか、刹羅君？」

「僕の修行って何ですか？
神鳴流の技は修得済みなんですが？」

「ああ…そうでしたね。
刹那君には、私も直々に指導するつもりだったんですが………刹羅君のは考えてなかったな。」

周りが呆れ顔です。

「……今回は、人対人。

刹羅君や刹那君、それに小太郎君には今回の計略に参加する必要は無いですし。」

「子どもが参加するには、ドロドロし過ぎてますからな。」

「では、旅に出て良いでしょうか？」

「旅に？……ですか？」

「はい、お願いします。」

レッツ土下座。

「……良いでしょう。許可します。

ですが、無理はしないで下さい。君の身に何か有れば、木乃香や皆が悲しむ。」

「御意。肝に銘じます。」

「旅に出るって、ホンマなん!？」

刹那と、評議場から部屋に戻ると、木乃香ちゃんがやって来て、僕に詰め寄って来ました。

木乃香ちゃんは、既に真帆良行きを理由を聞かされていて、僕も一緒に行くものだと思うっていたそうです。

「…何でウチと来てくれへんの？
ウチと一緒に居るんが嫌になったん？」

木乃香ちゃんが泣いています。

見知らぬ土地に一人で向かうのが心細い様です。

竜子さんが真帆良迄の護衛には付きますが。

「このちゃん、兄上は……。」

「刹那、少し外して下さい。」

刹那に退出して貰い、木乃香ちゃんにちゃんと向き合います。

「…このちゃん、僕は両面宿儻との戦いで自分の力を扱いきれていませんでした。」

それをこのままにして置くと、守るべき相手を僕自身が危険な目にあわせてしまうかも知れない。

そんな本末転倒な事態を避ける為にも
修行の旅に出たいんです。」

ついでにイギリスで後顧の憂いを断つ！

「…せつくんの『守るべき相手』ってウチの事って思って良え？」

「勿論です。」

後、刹那や総本山の皆さんもです。」

「……守る女の人がいっぱいやね？」

「そう言えばそうですね？」

木乃香ちゃんから呆れ顔で見られました。

何で？

「は…仕方ないな？」

強うなつて帰って来たら、今度はちゃんとウチを守ってな？」

「分かりました。」

「ほな、指切りや」

僕と木乃香ちゃんが小指を絡める。

『ゆゝびきゝりげゝんまゝん

うゝそついたらはゝりせんぼゝんのゝますゝ

ゆゝびきつた！』

第七話『形見』（後書き）

【てきとー巫女衆名前設定】

伏龍 ふしたつ 朱里 あかり

【笛】

双子の妹で羽根娘って事で刹那が>妖鳳王<化？

第八話『悪魔襲来』（前書き）

奇跡の村に堕天使は舞い降りたあああああつ！！！！（声：千。繁）

第八話『悪魔襲来』

フーテンの刹羅です。

旅には、木乃香ちゃんの真帆良行きと同じ日に出立。

真帆良へ向かう前の木乃香ちゃんから御守りを受け取り、僕からは一枚の白羽（自前）を渡しました。

旅の途中、中国で>瞬動<の直線的な動きを補う為に>迷踪芸<と言う歩法を身に付けたり、インドで修行していた男から>念法<を教わったり、某国で身長二メートル以上の大男の反政府ゲリラへの復讐に手を貸したり、旅先各地の料理を覚えたり、ラジバンダリして、現在はイギリスに來ています。

「>秘剣・五月雨斬り<!!」

――斬――

僕は今、悪魔と戦っています！

「――からの～>真・雷光剣<!!!!」

――轟――

雪空に白い翼が舞い、数多の悪魔を剣が斬り裂き、雷が灼き尽くす。

精霊の声を道案内に同行者と共にネギの住まう山村に向かっていくと、悪魔が村を襲っていました。

炎上する建物や草木、石像と化す人々。

悪魔襲来が何時なのか分からなかったのですが、今日だった様です。もつと前に来て、ネギに一般常識を叩き込むつもりだったのにな？ 寄り道が過ぎましたね。

今の服装は上下共に黒のブルゾンです。

「ん？あれは？」

上空の悪魔をとっちらかしていると、地上にスタンさんとネカネさんらしき人物が並んで此方を見上げている姿を認め、近くに降り立ちました。

「御二人共、御無事ですか？」

「…はい！」

「…主は何者じゃ？
敵ではない様じゃが？」

「僕は、

日本の京都神鳴流の剣士・桜咲剝羅。

元・紅き翼の青山詠春、現在の姓を近衛と申す方の弟子です。
この戦、義によって助太刀します。」

「何と…。

ナギの仲間だったサムライマスターの弟子とはのう…。

申し遅れた、儂の名はスタン。娘の方はネカネじゃ。

東方の御助力に感謝しますぞ。」

「神鳴流は人を守り、魔を断つ剣。

洋の東西など些細な事です。」

「あ…あの、赤い髪の小さな男の子を見かけませんでしたか？」

ネギの事ですね？

「いえ。ですが心配ありません。

その男の子は必ず助かります。」

「ああ…。」

ネギの安否を案じるネカネさんに、優しく微笑んで心配無用と告げると、その言を信じてくれた様で、安堵の息を漏らしました。

…何か、お祈りする様な仕草で僕を見ていますね？

僕は神様じゃ無い……ん？

そう言えば、ちょっとだけあたしゃ神様だよ！

羽根仕舞つとこ。

「さて、お話しは此処までにして…。」

「ウム、敵をトットと片付けねばならんわい！」

東洋の若武者と西洋の老魔術師との共闘が始まった。

「？わたしは！？」

「飛騨の大剣、その身に受けてみよ！」

刹羅の旅の同行者、両面宿儺の春の剛剣が、悪魔達を蹂躪して行く。

「どうした、西洋悪魔とはこの程度か！」

「お…お父さん？」

「うっは！？」

やるじゃねえか、お前！」

その光景に怯えるネギと、それとは対照的に喜色を浮かべるナギ。

悪魔に襲われそうになったネギをナギが助けるより先に、春が現れて助けたのだった。

「ふん！この位、当然だ！」

我こそは飛驒の＞両面宿儵くが片割れ也！

この戦が終わったら勝負してもらうぞ赤毛男！！」

春が二人の並ぶ方向に剣を向けて叫んだ。

「えっ！？僕！？」

「違う！大きい方の赤毛男だ！」

「赤毛男ってうるせえな！？

俺の名前は、ナギだ！！

ったく！

何で前に日本で封じ込めた奴がこんな所に居るんだよ！？」

「気にしたら負けだ！」

「そうかよ！」

……まあ、勝負出来たらな？

行くぜ！——>雷の斧く！！！！」

春と言いつつていたナギも悪魔をなぎ倒して行く。

ビュッ——ドシュ！

刹羅の旅のもう一人（？）の同行者の秋が、某滅却師の如く俊敏に動き回り、悪魔を矢で射抜き続けて行くと、視界に黒い洋服を身に付け金色の巻き髪をした一人の少女の姿が入った。

今、この周りには秋と少女しか居らず

その少女からは尋常ではない覇気が漂っている。

「……我が名は>両面宿儺くが片割れの秋。貴様は何者だ？」

「魔界の大公爵——>アスタロト<。」

シャッ

「くっ!？」

アスタロトが名を名乗ると同時に一瞬で間合いを詰め、横薙ぎに振るわれた大鎌を、秋は辛うじて避けた。

「へえ? 良く避けたわね?」

「速さに多少の自信があるのでな。」

(……これは、姉者と合神しても勝てるかどうか分からんな。それに……体が刃向かう事を躊躇うのは何故だ?)」

「下らない用件で喚ばれたものだと思っただけ……。
貴女が気に入ってたわ。私のものにならない?」

霸王の如き雰囲気纏い、突然そんな事を言い出したアスタロトに、秋は一瞬呆気にとられた。

「……随分と魅力的な申し出だな?
だが断らせて貰う。私は今の主を気に入ってるし、大恩があるのでな。」

「そうなの？それは残念ね。

今日の所は、貴女に免じて退いてあげるわ。

けど、覚えておきなさい、私は欲しいものは必ず手に入れる。」

そう言い残して、アスタロトは姿を消した。

秋は、アスタロトに向かって一矢も放たずどころか、弓矢を番える事もなかった。

「アスタロトか。

厄介な相手に気に入られてしまったな。」

秋は溜め息混じりに一人呟いた。

「…刹羅と合流しよう。」

「——>紅蓮斬月く！！！」

「――>雷の暴風く!!!」

春とナギの攻撃が、辺り一面の悪魔を吹き飛ばした。

其処へ、ネカネが駆け寄って来る。

「ネギ――！！！」

「！！」

ネ…ネカネお姉ちゃーーーーん！！」

呆然と立ち尽くしていたネギが、ネカネの声で正気に戻り、互いに駆け寄り抱き合う。

「ネギ…怪我は無い？」

「…うん、大丈夫だよ。

お父さんが助けに来てくれたから。」

「叔父様が…？」

「久しぶりだな、ネカネ？」

二人の側にナギが近寄り声を掛ける。

「お…叔父様!？」

「スタン爺さんもな。」

ナギの姿を見て、信じられないものを見た表情で立ち尽くすスタン老人。

「ナギ…？」

本当に、ナギなのか？」

「ああ。」

「このバカものが！」

ネギをほったらかして、今まで何処で何をしとつたんじゃ!！」

「い…色々あんだよ、色々。」

爺さんもネカネも、ネギの面倒見てくれてありがとな？」

「いえ、私は……。」

「フン…これからは貴様がちゃんと面倒を見るんじゃ……。」

スタン老人が帽子の鰐を掴み目深に被る。

「悪いな、爺さん。」

俺にはまだ、どうしてもやらなきゃならない事がある。」

「ム…。」

「お話し中、失礼します。」

「ん？お前は？」

「僕は近衛詠春の弟子、桜咲刹羅です。」

「詠春の弟子？」

俺の事は、知ってるか？」

「無敵の…魔法学校中退で、覚えているのは五、六個、他はあんちよこ使いの呪文の男だと。」

「ぐはあっ!？」

ああ、思わず言ってしまった。

「え…えーしゅんの野郎、余計な事を教えやがって!」

詠春様からの知識と思った様ですね？

前世知識なんですが、まあ別に良いでしょう。

「お…お父さん？」

ネギがナギさんを『嘘だよね？』って感じで見ています。

「…ネギには残念じゃが、それは本当じゃ。」

スタンさんがネギの肩をポンと叩きトドメを差しました。

親子で両手両膝を地につけて、ズーンと沈んでいます。

「……私はそんな奴に。」

春さんですか。

ウザいからフォローしときます。

「まあ、実際に千の呪文を覚えても、使いどころがあるか謎ですし、それでも無敵なんですから気にする必要は無いと思いますよ？」

「ハッ…！」

そうだ！俺は無敵の男だぜ！！

使い道のわからねー呪文なんか不要だ！！！！」

ナギさんが立ち直りました。
それに釣られて、ネギと春さんもです。
良かった良かった。

「とりあえず聞きたいのは、真帆良に居る＜闇の福音＞への呪いを解除しに行かないんですか？」

「あ、忘れてた！」

ダメだ、行けそうにねえし…お前らで解除出来たらやっといてくれ。
…確か、しんめー流の“ぐんまけん”てやつなら呪いの精霊も斬れるんじゃないか？」

「“斬魔剣”^{ざんまけん}です。」

何故、人口約二百万。

名物は『上毛かるた』や『焼きまんじゅう』とかで、持つ時はこうの関東地方の県名が出てくる？

「やみのふくいんて何？」

ネギが質問して来ました。

「ナギさんが日本に囲った愛人です。」

「ぜってー違うー!!」

「冗談ですよ。」

本当はナギさんのしつこい追っかけです。
まあ、機会があれば解除しておきます。」

ザッ

その時、不意をついて現れた一体の悪魔が、口をガパツと開き閃光を撃ち出した。

射線上にはネギの姿。

それを、スタンが身を挺して防いだ。

「ぐむ…。」

だが、スタンの体が徐々に石化して行く。

其処に、悪魔が使い魔と共に向かって来るが、右横から頭部を狙い一条の矢が飛来し、悪魔は寸での所で立ち止まり避けた。

一瞬の隙。

「てめえ、よくも…！」

「儂がやる…！」

石化中のスタンは激昂するナギを制して、袖から何とか一つの瓶を取り出し、呪文を唱える。

「六芒の星と、五芒の星よ！

悪しき霊に封印を！——>封魔の瓶く！！」

悪魔は使い魔と共に、その瓶へと封じ込まれた。

だが、スタンの石化は止まらずに進行して行く。

「おじ…お爺ちゃん…。」

「爺さん…無茶しやがって！」

「ナギ…お前が死んだと聞いた時…僕は、一つだけ誓った。

…どんな事があっても、ネギだけは守ると…。」

僕はもう助からん…ネカネ、ネギを頼む。決して甘やかすで無いぞ？
キチンと一般常識を教えるんじゃ。

それと…メルディアナの校長に、日本の魔法組織に感謝の礼を送る
ように伝えてく…れ。」

そう言い終えると、スタンは完全に石化した。

ネカネは涙を流し、自分の服の胸元を握り締める。

「お爺様…。」

はい、分かりました！」

「刹羅！」

矢が飛んで来た方向から、秋さんが姿を現しました。

警戒するナギさん達。

「彼女は味方です。

やはり、さっきの矢は秋さんでしたか。」

「うむ。だが…すまん。」

秋さんが、石像と化したスタンさんを見て謝罪しました。

「…良いさ、それより村から離れようぜ？」

刹羅達が村から離れた草原に避難すると、他にも避難して来る人達が居た。

ナギの姿を見て吃驚したり、刹羅が空で戦っていた姿を見た者が天使と崇めたりして、ちょっとした力オスだった。

ナギは、ネギに形見として杖を渡して消え去り、刹羅達もネギにナギの手がかりが日本の京都に有る事を告げ、再び旅立った。

そして三日後、ネギ達は救助されてウェールズの山奥に移り住む事になった。

「あ！」

「姉者？」

「どうしました春さん？」

「赤毛男と勝負するのを忘れていた！」

第八話『悪魔襲来』（後書き）

ムチャクチャでござりますがな。

第九話『千の刃の男』（前書き）

今迄より更にムチャクチャだと思えます。

第九話『千の刃の男』

（閑話）

京都に存在する、関西呪術協会総本山。

其処に、一人の英国人女性が来訪していた。

現在、公務の場に通され、協会の長である近衛詠春と向かいあっている他、その場には協会幹部陣も出席していた。

「関西呪術協会の長、近衛詠春です。

この度は遠路、御苦労様です。」

「お目通しをお許し頂きありがとうございます。

メルディアナ魔法学校からの特使として参りました、ドネット・マクギネスです。」

「早速ですが、御用件をお聞かせ願いませんか？」

「その前に確認しておきたいのですが、セツラ・サクラザキと言つ白い髪の少年は、此方の組織の所属で間違いありませんか？」

「刹羅君なら、その通りです。」

「そうですか、失礼しました。

実は先日、我が母国に存在する魔法使いが住まう村が、悪魔の大群に襲われてしまったのです。

その村には、近衛公の盟友ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギと言う少年も住んでいました。

実力者揃いの村の者達ではあったのですが、それでも全滅は免れそうにありませんでした。

ですが、其処に彼の少年と共の者が現れ、悪魔達を撃退する事に協力してくれて、先程申し上げたネギ少年及び数十名が生き残りしました。

確かに犠牲者は出ましたが、彼等は被害を軽減してくれたのです。

私は直接、現場を見ていた訳ではあませんが、村の生き残りの者達からの証言もあり、こうして御礼を述べに参上した次第です。

本当に有り難う御座いました。」

ドネットは頭を下げ、感謝状を詠春に差し出した。

「…しかと受け取りました。」

詠春は余りの話に内心、呆氣にとられながらも平静を装い対応した。

「更に、メルディアナでは、これを機に皆様方と交流を深めたいと考えています。」

そう言うと、今度は親書を差し出した。

「これは、どうも。」

交流についての返事は、今すぐとは行きませんが、御期待に添える様に前向きに検討させていただきます。」

この地に異国からの公的使者が来訪したのは歴史的に初めての事で（ナギ達は詠春の個人的友人と言う立場だった）その場に、派閥に関係なく出席していた協会幹部達も、ドネットの礼節を守る態度に概ね悪い印象は無く、西洋魔術師への反感を持つ者でも、多少は気持ちを緩和させた者も居た。

それと同時に、>紅き翼<ですら封印迄しか出来なかった（やらなかった？）両面宿讎を一人で降し、問題無く使役する刹羅が詠春の切り札的存在だと認識された。

（閑話終了）

るろくに刹羅（十歳）です。

閑話から、少し時間が飛んでいます。

ネギ村（仮名）の悪魔襲来事件から数日後、魔法世界に入りました。勿論、御都合主義により、春さん秋さんも一緒です。

んで、こっちに來てからは『るろくに』と言うより『ドラマた』な感じで行動してます。

その時に偶々、原作の魔法世界行きで出て来た四次元ケース（正式名称不明）を手に入れて荷物運搬が楽になりました。

後、何時の間にか二つ名がついて『告死天使』とか『烈火の剣士』とか『青い弓兵』とか『赤いき。ね』と『緑のた。き』とか。

他にも、流しの料理人をやって、食べたとある美食家が海上を走ったり、何故か大陸と呼ばれている島国の王国主催の武道大会に出場して優勝したりしました。

武道大会はチームの人数制限無しで、大昔には四人組の内の一人のエルフ娘が百人の美青年を瞬殺したそうです。

修行もちやんとやっていますよ。

心・技・体を鍛え、亀の甲羅を背負ったり、刃こぼれた日本刀で木を斬ったり、大瀑布を拳で逆流させたり、我が斬。刀＞飛天く対話したり、感謝の正拳突き一日一万回とか、

武道大会などで神鳴流を見せ物にする訳には行かないのでネタに走った剣技・体術とか。

此処までの説明に、幾つか冗談が混じってます。答えは一万年と二千年後に発表。

「ん？」

野を歩いていると、先行していた春さんが何か見つけた様です。

「あれは遺跡か？」

「人が居るみたいですね？」

遺跡っぽい所の外で褐色肌の大男が昼間から酒をかつくらってました。

ジャック・ラカンのようです。

折角なので挨拶しましょう。

「――>雷鳴剣く。」

「ぶぺら!？」

雷撃がラカンに直撃しました。

「てめえら、いきなり何しやがる!？」

ラカンがこっちに急速接近して来ました。
流石にバグキャラ、ピンピンしてます。

「失礼しました、ジャック・ラカンさん。

先程のは神鳴流式の挨拶です。

僕は近衛詠春の弟子、桜咲刹羅。

此方は二人で一人の両面宿儺です。」

「両面宿儺、姉の春だ。」

「妹の秋だ。」

「はあ！？詠春の弟子に両面宿儺だと！？

てか何だ、さっきのが挨拶って！？」

「初対面なら＞雷鳴剣く、顔見知り程度なら＞雷光剣く、親しい間柄なら＞真・雷光剣くを相手に繰り出すのです。」

「それぜってえ嘘だろ？」

「やっぱり分かりますか？」

「あたりめえだ！…って？

ん？詠春とこの桜咲？

お前、那羅って奴知ってつか？」

「父を御存知で？」

「お前の親父かよ！

昔、京都に行った時に会ったぜ！

神鳴流じゃ技の詠春、力的那羅とか言われてたそうじゃねえか？」

どうやら僕の父は二号ライダーだった様です。てか、そんなに強かったのか。」

「親父さんは今も元気か？」

「いえ、両親共、既に他界してます。」

「そ、そうか？悪い事聞いたな？」

「では、先程の挨拶の分とでチャラって事にしておいて下さい。」

「うーん？まあ、良いだろ。」

「んで、俺に何か用でもあんのか？」

「修行をつけて下さい。」

「後、>紅き翼<の映画を複製させて下さい。」

「嫌だ、めんどくせえ。」

「何だと貴様！刹羅の頼みを断るとは！」

春さんがラカンに剣を向けて、今にも斬り掛からんとしています。

「落ち着け姉者！」

「春さん落ち着いて。」

何とか止めました。

「どうしてもってんなら、料金に五百万ドラクマ払え。」

「良いですよ。秋さんケースを。」

「うむ。」

秋さんに預けてある四次元ケースから、実際に五百万ドラクマを取り出しました。

が、ラカンが顔を引き攣らせて受け取り拒否。それでも、修行を見てくれる事になりました。

「——で、どんな修行がしてえんだ？」

「格上との実戦経験です。」

後、余り魔力を活用していないんで、西洋魔法を覚えようかと。」

この人、初心者用の発動キーで上級魔法を発動させてましたからね。

え？>闇の魔法く？やりませんよ？

僕には>咸卦法くと、それ以上の>神化法くがありますし、恐らく向いてないでしょう。

「そんじゃあ今から組み手やつから、お前の今の全力で掛かって来な？」

「了解。」

背の白い翼を展開し、精神統一。

―我が心、既に空なり。―

「右手に>気く、左手に>魔力く。」

「>咸卦法くかよ!？」

―空が故に無なり。―

両手を拝むように合わせ、内なる>力<を天へと駆け上らせる。

「額（天）に>神力<——合成>神化法<！！！！」

「何！？」

火の鳥状態ではなく、額のチャクラが開いた以外は変わらない姿に
>神炎<を纏う。

「おいおい…とんでもねえ小僧だな？」

「刹羅、行きます！」

蜘蛛の巣の如き歩法から瞬動で接近し、拳を繰り出す。

「>紅蓮拳<！！」

「ぐえっ！？」

拳がラカンの腹に直撃しました。ですが——

「がはっ…！」

——カウンターで、同じく腹に拳を受け、お互いに吹き飛びました。

ダブルK・Oです。

かなりダメージがキツイですが、
医療神・両面宿儺が居るので怪我の治療は無問題です。

～ラカン side～

俺が昼間に気分良く優雅に酒を飲んでたら、通行人の気配があった。

俺は気にも止めなかったが、そいつらはいきなり俺に雷を喰らわし
やがった。

小僧一人と美女二人だ。

それを挨拶だとかふざけた事をぬかした小僧は昔、詠春のダチで京都で世話になった奴の息子で、美女二人は両面宿儺つつう京都で戦

った鬼神だそうだ。

俺は小僧に親父の事を聞いたが、親父もお袋も死んじまったそうだ。俺達と結構気の合う奴だったんだがな。残念だ。

小僧に俺に何の用があるのか聞くと、修行をつけると、あの映画の複製をさせるって言い出しやがった。

映画は詠春にでも聞いたんだろ。

どうせ暇だったし、世話になった奴の息子だから別に構わなかったんだが、冗談で大金を請求したら、ポンと出しやがった。

焦った俺は、金を突っ返して、小僧の修行を見てやる事にした。

どんな修行がしたいか聞くと、格上との実戦と西洋魔法と答えやがったから、先ずは小僧の実力を確かめる為に組み手に入った。

俺が小僧に全力を出せと言うと、了解と答え、小僧の背中に白い羽根が現れた。

どうやら何かとの混血児だったようだ。

小僧が右手に氣と左手に魔力を宿らせると、俺は咸卦法かと思ったが、更に別の力が額に現れ、小僧が三種類の力を合成させると、とんでもねえ力の“炎”を生み出しやがった。

成る程、強い奴との実戦経験が不足してる訳だぜ。もう既に最強クラスじゃねえか。

そして小僧…いや、刹羅は複雑な歩法で接近して来た。瞬動程じゃねえが、かなりの速さだ。

そこから刹羅は流れるように瞬動に切り替えて、炎の拳を俺の腹に目掛けて撃って来やがった。

思わず俺は“本気”でカウンターを撃ち放ち、お互いに吹き飛んだ。

＼ラカンside・out＼

第九話『千の刃の男』（後書き）

ドネットが無事に総本山に着いたのは、事前連絡を受けた総本山からの迎えが行っていました。

第十話『魔法師匠』（前書き）

何だこれ？

第十話『魔法師匠』

刹羅です。

ラカンとのダブルノックアウトの後、お互いに両面宿儺から治癒術を受けました。

流石に医療神、見事なベホマズンです。

お礼を言わないといけませんね。

「春さん、秋さん、ありがとうございます。」

「い…いや、気にするな！」

「フフ、当然の事をしたまでだ。」

春さんは顔を赤らめて慌てて、秋さんは優しく微笑んでいます。

「俺も助かったぜ。ありがとうよ。」

「せいぜい感謝するが良い！」

「全く、面倒くさかったな。」

ラカンにはぶっきらぼうに答えました。

「態度が露骨に違い過ぎねえか？

まあ良いけどよ。それにしても吃驚したぜ、何なんださっきのは術は？」

「>神化法くと言います。神の力を加えた咸卦法の上位版だと思って下さい。」

「ふーん、究極技法とか呼ばれる咸卦法の上にそんなもんがあったとはな。

そんな力まで持つてて、何で更に強くなりてんだ？」

「“護るものを護る力を持ち、必ず笑って死ぬ為”です。」

ラルク・デトワール

星弓覇光乱舞は放ちませんよ？

オリオン座の星座剣も無いし。

「僕と双子の妹は人と鳥族という妖とのハーフで、僕達の持つ白い羽根は鳥族にとって忌み子の証です。

更に現在、僕達は鳥族の掟を無視している状態なので処断しようと動く可能性があります。

僕達を引き取り、育ててくれた詠春様と総本山は、政治的に孤立無縁に等しい状態です。

更に、詠春様の御息女である木乃香お嬢様の持つ潜在魔力はサウザンドマスター以上です。利用しようと画策する者が居るでしょう。

此処に居る両面宿儺の春さんと秋さんも、悪鬼と断じて再度封印を

しようと思える者も居るかも知れません。

それぞれ、それ以外の凶事も考えられます。

僕は、大切な者を守りたいのです！

ですが、これだけの者を守り通すには、僕は未だ力不足です。」

「成る程、色々と抱え込んでやがんな。

お前の考え方は分かった。俺様が徹底的に鍛えてやるぜ！」

「ありがとうございます、マスター・ラカン！」

「おう！悪くねえ呼ばれ方だな！」

「ラカン！！！」

「おわ！？急に何だ！？」

春さんがいきなり大声でラカンの名を呼びました。

「刹羅にそのような不安を抱かせていたとは何たる不覚！！
我々は更に強くならねばならん！

私と秋も共に修行するぞアツケラカン！！！」

「姉者、こやつの名はスツカラカンだぞ。」

「ジャックだ！！ジャック・ラカン！！！」

という訳で、三人でラカンの下で修行する事になりました。

魔法修行です。

こんな事もあるつかと購入しといった初心者用の杖を用意しました。

両面宿儺は別メニューで武技を磨いています。

「周囲の魔力を呼吸をするように取り込み、杖の先に意識を集中して、プラクテ・ビギ・ナル“火よ灯れ”って唱えてみる！」

「プラクテ・ビギ・ナル“火よ灯れ”！！」

ゴォッ！！

杖の先から漆式>虚空くが出ました。

「何でさ！？」

「おいおい、ナギよりバグだな？」

$$\begin{array}{c} \vdots \\ \circ \\ \text{or} \\ z \end{array}$$

…とりあえず、魔力制御から努めよう。

[illegible]

「ちんきゅんきいいいいいっく!」

「もれっ!？」

一人の女の子が遠くから此方へと駆け寄りラカンに飛び蹴りを喰らわしました。

「貴様のさっきの炎で危うく消し炭になる所でしたぞ!!」

「いや、ありやあ俺じゃねえぜ？」

「嘘つくなですぞ!!」

虚空の射線上に居たのか。

荒ぶる鷹のポーズでラカンに怒鳴る女の子に本当の事を話す。

「すいません、さっきの炎は僕です。」

「むむ！？それは本当なのですか！？」

驚いた表情で女の子が僕を見る。

「本当です。」

御免なさい、御迷惑おかけしました。」

深々と頭を下げました。

「か…勘違いしたのは謝っておきますぞ！悪かったのです！
兎に角、攻撃魔法の練習をするならもっと周りに気を配るものですぞ！…！」

「いえ、初心者用の“火よ灯れ”をやってたんです。」

「あれの何処が初心者用呪文だったのですか！？」

「百聞は一見に如かず。プラクテ・ビギ・ナル“火よ灯れ”！！」

今度は杖を上空に向け、もう一度“火よ灯れ（虚空）”を繰り返す

ました。

「とまあ、こんなに出ましたけど？」

「ア…ア…アホな…ですぞ。」

開いた口が塞がっていませんぞ？

「ネ…ネネの名前はチン・キユウ・ネネネなんです！お前の名前を教えるのです！」

「桜咲刹羅です。」

「其処のデカブツ…何処かで見たような？
コイツは刹羅殿の魔法の師匠なのですか？」

「ん、俺か？そうだ、つつてもまだ初日だけだな。」

「お前みたいな見るからに脳筋に、繊細さが必要な魔法の師匠がつ
とまるとは思えないのです！ネネが教えてやりますぞ！
今は休暇中ですが、ネネはそれでも魔法学術都市アリアドネーの講
師なのです！」

見た目通りの年齢ではないのか、子供先生なのか分かりませんね。

「セラスんとこのか？」

それなら頼んだ！ありがてえぜ！」

「むむむ？お前はセラス総長の知り合いなのですか？」

「俺はジャック・ラカンだ！セラスとは古い知り合いだぜ！」

「な…なんですとおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおお！？」

出会ったのが英雄ジャック・ラカンとの事でネネが吃驚仰天です。

「ネネネネさん、アリアドネーには戻らないんですか？」

「ネネネですぞ！ネネ先生と呼ぶのです！
あんなのをぶっ放すような者をこのままほっとく訳にはいかないの
です！」

アリアドネーには後でちゃんと連絡しますぞ！」

こうして、ネネ先生が僕の魔法師匠になりました。

後で、僕がサムライマスターの弟子でもあると教えると、またもネ
ネ先生はくりびつてんぎょうとなりました。

「んじゃ俺はあの二人の面倒見ているぜ！」

ラカンが春さん秋さんの方に向かいました。

その後、遠くの方で『こ…この変態があああ！』とか『下着を返せ！』とか聞こえたような聞こえなかったような？

＼ネネネside＼

ネネはアリアドネーの魔法講師ですぞ！

今回は休暇を取り、故郷の両親の墓参りを終えてアリアドネーに戻ろうと、てくてく歩いてたその時に、ネネに向かって破壊光線が飛んで来たのです！

「な！？>氷楯く！！！！」

魔法の楯で防御するも、威力が凄まじく、超高速多重詠唱で連続展開しなければ危つく焼滅する所でしたぞ！

「こ…こんな辺鄙な場所で人知れず焼死するなど冗談では有りませんぞ！」

あんな物をぶつ放した輩に天誅を与えるのです！」

ネネは光線の来た方向に向かって駆け出し、暫くすると褐色の大男と白い髪の子が見えたのです！

きっと犯人は大男の方なのです！見敵必殺！目標をセンターに入れてロックオン！狙い撃ちますぞ！

「ちんきゆうきいいいいいく！！」

「もれっ！？」

ネネの必殺ちんきゆうきつくが大男の顔面に見事に決まったのです！どうせだったらそのまま紫色の煙を撒き散らして高速回転しながら上昇して爆発するが良いのです！

「貴様のさっきの炎で危うく消し炭になる所でしたぞ！！」

「いや、ありゃあ俺じゃねえぜ？」

「嘘つくなですぞ！！」

そんな言い訳は通用しませんぞ！！

「すいません、さっきの炎は僕です。」

そんなバカなですぞ！？

大男に自分の罪を数えさせよとしていると、白髪の少年が告白して来たのです！

「むむ！？それは本当なのですか！？」

「本当です。」

御免なさい、御迷惑をおかけしました」

少年が深々と頭を下げたのです！

どうやら本当みたいですよぞ！？

「か…勘違いしたのは謝っておきますぞ！悪かったのです！

兎に角、攻撃魔法の練習をするならもっと周りに気を配るものですぞ！！」

大男に勘違いしたのを謝って、少年には注意を与えたのです！

「いえ、初心者用の“火よ灯れ”をやってたんです。」

「あれの何処が初心者用呪文だったのですか!？」

有り得ませんぞ!？」

「百聞は一見に如かず。プラクテ・ビギ・ナル“火よ灯れ”!！」

少年の破壊光線な“火よ灯れ”が天空を貫きましたぞ!？」

「とまあ、こんなに出ましたけど?」

「ア…ア…アホな…ですぞ。」

こ…これをこのままにしておいたら大変な事になりますぞ!？」

「ネ…ネネの名前はチン・キユウ・ネネネなのです!お前の名前を教えるのです!」

「桜咲刹羅です。」

刹羅殿ですか!なかなかの美少女ね……ゲフンゲフン。

刹羅殿から目を逸らすと、大男と目が合ったのです！

そう言えば、刹羅殿が初心者用呪文の練習をしていたという事はコイツが教えていたのですか？

「其処のデカブツ…何処かで見たような？

コイツは刹羅殿の魔法の師匠なのですか？」

…この大男、何処かで見た気がしますぞ？

「ん、俺か？そうだ、つつてもまだ初日だけだな。」

魔法を教える者は、その理論と仕組みを理解している必要があるのですぞ！

「お前みたいな見るからに脳筋に、繊細さが必要な魔法の師匠がつとまるとは思えないのです！ネネが教えてやりますぞ！

今は休暇中ですが、ネネはこれでも魔法学術都市アリアドネーの講師なのです！」

「セラスんとこのか？

それなら頼んだ！ありがてえぜ！」

何やらセラス総長と親しげなのですぞ？

「むむむ？お前はセラス総長の知り合いなのですか？」

「俺はジャック・ラカンだ！セラスとは古い知り合いだぜ！」

「な…なんですとおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお！？」

お…思い出しましたぞ…！

教科書にも写真が載っているのです…！

「ネネネさん、アリアドネーには戻らないんですか？」

“ネ”が多いですぞ…？

「ネネネですぞ！ネネ先生と呼ぶのです！

あんなのをぶっ放すような者をこのままほっとく訳にはいかないの
です！

アリアドネーには後でちゃんと連絡しますぞ！」

こうしてネネは刹羅殿の魔法の師匠になったのです！

しかも話を聞いたら、サムライマスターの弟子だとも言つてはありませんか！

最早、何と言えば良いか分かりませんぞ！？

「もしもし、セラス総長？ネネですぞ。」

『あら、どうしたの？』

刹羅殿の面倒を見た後、アリアドネーのセラス総長と通信中なのです。

「実は、かくかくしかじかな理由でもう暫く戻れないのです。」

『…サムライマスターとジャック・ラカンの弟子の一人の少年に魔法を教えるのね？』

突拍子の無い話だけど、貴女が嘘をつくとは思えないわ。

…ネネ先生、どうせならその少年とラカンのアリアドネーに連れて来られませんか？』

「何故なのですか？」

『その少年に、こつちで特例として学ばせてあげようと思ったのよ。男と言つても十歳位なら大丈夫でしょう。』

アリアドネーは学ぼうとする意志と意欲が有るなら例え死神でも受け入れます。

ラカンは臨時講師ね。彼の豊富な実戦経験は充分に生徒達の糧となる筈です。」

「連れて行くのは構いませんが、先ずは本人達の意志を確認してからの話ですぞ?」

「それもそうね。では確認が取れたら
ネネ先生、もう一度連絡を入れて下さい。」

「あ、それと少年には女性の同行者が二人居りますぞ?」

「じゃあ、その二人も来るなら受け入れるわ。」

「了解しましたぞ。」

くネネネside・outく

くおまけく

『臨時ニュースです！』

本日未明、地球に向かっていた巨大な隕石が火星付近で爆発しました！

尚、この原因について詳細は未だ明らかにされておらず――。』

「C案なんて有ったけ、お父さん？」

「…無い。」

第十話『魔法師匠』（後書き）

やあああああっちゃまったぜ!!

第十一話『魔法学術都市アリアドネー』（前書き）

あんまり内容は無いよう。

第十一話『魔法学術都市アリアドネー』

刹羅です。

魔法師匠ネネね！…もとい、ネネ先生による指導のおかげで効率的魔力運用が出来るようになり、>火よ灯れ<の火力を百円ライターから漆式>虚空<まで調整可能となりました。序でに得意魔法属性チェックを試してみた結果、僕は【火】【風】が得意と出ました。

現在、ネネ先生から、僕と春&秋さん、ジャック・ラカンの四人でアリアドネーにこないかと誘われてます。

「三日後に迎えが来ますぞ」

「行っても良いぜ。脱がし合いレースも生で見えし」

「蹴りますぞ！」

「僕も行くのは構いませんが、マスター・ラカンからの修行は如何なるんですか？」

「それにアリアドネーでの住居は？」

「言っておくが、私と秋は刹羅と一緒に住まわせて貰うぞ！」

「だが、其処の変態は別の住処にしてくれ！」

「ガハハ！随分と嫌われたもんだぜ！」

「…自業自得でしょう」

「住む所はセラス総長がどうかすると思いますぞ。ラカン殿との修行についてはそっちで決めて下され」

「向こうに行かねえ事には何も決まらねえな？」

「…全てはアリアドネーに着いてからですか」

…ネギボーイの心労を少しだけ理解した気がするのデース。

三日後に迎えが来るまでの間、ラカンからは基礎鍛錬と組み手で地力の底上げ。

ネネ先生からはよりスムーズな魔力運用と、基本魔法の【小物動かし】【天気予報（石。。。純クラス）】を覚えました。

例の映画も皆で観て、複製も頂きましたよ。

「所で、裸の妖精達って、あ後は如何したんですか？」

「ん？そう言や、まだ持ってたな？
欲しけりややるぜ？」

「ま…まさか、欲しいのですか！？」

「によ…女体に興味が有るなら私が教えてやるっ！！」

「姉者、私が先に刹羅の筆――！！」

「ストップ！！僕が悪かった！！」

何となく気になっただけで要りませんし、春さん秋さんも落ち着いて下さい！！」

ちょっとした疑問を述べただけで、何故こんな混沌になる！？

特に秋さん、貴女が春さん以上に暴走して如何するんですか！？

で、三日経過。アリアドネーから飛空巡洋艦一隻が迎えに来ました。

『お…お迎えにあがりました>アリアドネー魔法騎士団<です！！』

『伝説の英雄ジャック・ラカン殿にお会い出来て光栄であります！！』

「おーう、御苦労さん」

ラカンの突発サイン会が開催。

僕の方も英雄二人の弟子つてことで囲まれました。

そして出立。

道中、ラカンからは戦闘知識と経験を聞き、ネネ先生と騎士団のお

姉さん方からも指導して貰い、【熱波or風花・武装解除】【炎or風・楯】【戦いの歌】【加速】【気合い】【熱血】【ド根性】を覚えました。

最後の三つは嘘です。

別に、>武装解除くで誰も脱がしてはいませんよ？

騎士団の方々へ、御世話になったお礼に艦内の厨房を借りて、団子と餡蜜と、辛党な人に唐辛子スイーツを作って差し上げました。

「どうですか、お味は？」

『『美味し！！！！』』

どうやら好評の様です。

「刹羅君、私の嫁になってくれ！！」

団員一人からガシツと両手を握られました。

「お…お断りします」

「貴様、刹羅から離れろ！」

春さんが押し離しました。

秋さん、無言で弓矢を構えようとしないで下さい。

ネネ先生、シャドー・キック・ボクシングですか？

そんなこんなで巡洋艦はアリアドネー騎士団本部に到着。
艦を降りた後、本部内応接室に案内されました。

頭に角を生やした一人の女性が居ます。

「只今戻りましたぞ総長」

「お帰りなさいネネ先生。皆さんもお疲れ様。私が総長のセラスです」

「初めまして、桜咲刹羅です」

「宿儺春だ！」

「妹の宿儺秋」

「ジャック・ラカンだぜ！」

春さん秋さんは両面宿儺の宿儺^{すくな}を姓という事になっています。

セラス総長に促されてソファーに座ると、総長からお茶の用意をして頂けました。

「すみません、総長自ら」

「お…恐れ多いですぞ」

「フフ、気にしないで？」

セラス総長は、にこやかに対応しています。

「久しぶりねラカン。」

正直、貴方が此方の要請を受けてくれるとは意外だったわ。…うちの娘達に可笑しな真似しなかったでしょうね？」

「おいおい、呼ばれたから来たつてのにひでえな？
安心しな、手なんざ出しちゃいねえぜ？」

「信じましょう。失礼したわ」

「おう」

「さて、刹羅君。

貴方は魔法を学びたいそうね？

此処、アリアドネーは学ぶ意志を持つ者はどの様な者でも受け入れます。

貴方は、どんな魔法をどんな理由で覚えたいのか聞かせて貰えるか

しら？」

「僕が覚えたいのは戦闘用魔法と>石化<及び>登校地獄<の解呪です。

戦闘魔法は、大切な者達を護る為。

呪いの方は、ナギさんの息子のネギ君が住んでた村で悪魔に遅れをとり、目の前でも爵位級悪魔に御老人一人を石化されましたし、ナギさんからは馬鹿魔力で掛けたエヴァンジェリンの>登校地獄<を可能ならば解いといってくれと頼まりましたので」

「ちょ…ちょっと待つのです！？」

呪いの事で気になる言葉が出まくったのはさておいて、ネネはそんな話、聞いてませんぞ！？」

「俺も聞いてねえぜ？」

「聞かれなかったので」

「うおいですぞー！！」

「…爵位級悪魔からの>石化<の解呪。かなり高度ね？
それに、>登校地獄<も厄介そうだわ」

セラス総長が何やら考え込んでます。

「刹羅君、貴方には>魔法騎士団候補学校<に入学して貰うわ。其処なら戦闘訓練もあるし、書庫の蔵書も豊富よ」

「…其処って女子校ですよね？」

「特例って事にしておくわ。」

「ラカンには其処での臨時講師をお願いするわね？」

「貴女は何処のぬらりひょんですか？」

「おう、任せな」

「…分かりました。一つ、お願いがあります」

「何かしら？」

「僕は自力で飛べるので、筈での飛行訓練は免除して下さい。その時間帯は解呪の研究をさせて貰います」

> 虚空瞬動くも使えます。

「良いわ、許可しましょう」

「有難う御座います」

「セラス殿、私も刹羅と共に学ばせて貰えぬか？」

「おい、秋！私もやるぞ！」

「二人も良いでしょう。やる気のある者は歓迎するわ」

「良し！」

「済まぬな、感謝する」

「フフ、どう致しまして。」

皆さんの制服や住む場所は明日には用意しておくわ。
今日の所はホテルの部屋を用意してあります。

ネネ先生、このホテルに案内してあげてね？」

ネネ先生がセラス総長から、僕達の泊まるホテルのメモを受け取りました。

「了解しましたぞ」

「ネネ先生は如何するんですか？」

「ネネは家に戻りますぞ。」

このホテルは丁度、通り道なのです」

「ネネ先生も帰ったらゆっくり休んで、明日の朝に皆さんを迎えに来て頂戴。」

…色々と用を申し付けて悪いわね？」

「いえ、この位お安い御用ですぞ」

「では皆さん、また明日お会いしましょう」

で、ネネ先生の案内でホテルに到着。

一泊して、早朝にネネ先生が迎えに来て、アリアドネー魔法騎士団候補学校・総長室に案内されました。

早朝：総長と朝の挨拶を交わした後、用意された制服に別室で着替えました。

春さんと秋さんは学園指定の制服。

僕の制服は、フェイトの着ているタイプで、左胸のポケットにアリアドネーの紋章が入った白い上着と黒いズボンです。

そして――

「何か変か？」

筋骨隆々の肉体を地味な濃紺のスーツで包み、長い髪をセットして七三に分けて首の後ろで束ね、フレームの太い黒縁眼鏡をかけた、褐色肌の巨漢が居ます。

ジャック・ラカンです。

良く言つて、教師のコスプレです。

大爆笑している春さん以外、僕も周りも笑いを堪える事で精一杯です。

「ぶ…み…皆さん、朝礼を…行っから…案内します」

「わ…分かり…ました。うくく…」

セラス総長も僕もピクピクと痙攣しながらのやりとりでした。

セラス総長に案内されて校庭まで来ました。

僕、春さん、秋さん、ラカンの四人はロープで姿を隠してます。

「皆さんお早う御座います。

今日は転校生と臨時講師が来ています。

先ずは転校生から御挨拶をお願いします」

セラス総長が壇上で朝の挨拶を交わした後、セラス総長に促され、僕と春さん秋が壇上に上がり、ロープを脱ぎました。

女生徒達からの注目が集まっています。

「では、刹羅君から自己紹介をお願いします」

「はい。

此方と言う所の旧世界から来ました、桜咲刹羅です。
御覧の通り男子ですが、セラス総長の御厚意により、特例としてこ

の学園に通う事になりました。どうぞ宜しく」

『うええ！？そんなの良いの！？』

『…総長、何を考えてるのかしら？』

『良いじゃん、格好いいし』

『総長、ナイス！』

『…中性的だし、男子って言われなきゃ分かんないわ』

『服装でも分かるんじゃない？』

『男装の可能性も捨てがたいですわよ？』

『旧世界について、詳しく教えて欲しいですの』

わいわいがやがや。

「皆さん、まだ一人目ですぞ！静かにするのです！」

ネネ先生からの注意が入り、静かになりました。

「宜しい。

ネネ先生、有難う御座います。

続いての方、自己紹介をどうぞ」

「宿儺春！刹羅の護衛役だ！」

「同じく、宿儺秋。春の妹だ。

刹羅共々、宜しく頼む」

『三人は知り合いなのか』

『この学園じゃあ、護衛付きは珍しく無いわね』

『…秋お姉様』

「尚、この三人は自力飛行と虚空瞬動も可能なので飛行訓練は免除とし、代わりにその時間帯は高位治癒の研究をする事を私が許可しました」

『三人共、A級以上の達人て事！？』

『幾ら何でも特別扱いし過ぎなのでは…？』

『でも、自分で飛べるそうですし…』

『筈必要ないんだ…』

『セラス総長、質問です』

「どうぞ」

『其方の御三方がこの学園に入学して来られたのは、その高位治癒

術の研究とやらが関係しているのでしょうか？」

「僕が答えます。その通りです」

『でも、それでしたら他の学校でも研究は可能なではありませんか？』

「この学園の授業と蔵書は魔法世界でもトップクラス。更に、高度な戦闘訓練もありますからね。

特に、僕の戦闘方法は“一騎駆け”が主で、他者と連携をとるのが未熟なんですよ」

春さん秋さんと組んで、マスター・ラカンと三対一でやり合ったら、僕がめがつさ足を引つ張りました。

それを考えると、悪魔襲撃の時のスタン老人のサポート能力は表現されて無い事が惜しい位に高かった。

「もう宜しいですか？」

『はい。有難う御座いました』

「では、最後に臨時講師殿、御挨拶をお願いします」

ラカンが壇上に上がり、ローブを脱ぎました。

「今日から此処で臨時講師をやる、ジャック・ラカンだぜ！」

一瞬の静寂の後、大絶叫。

「あの筋肉は間違いないよ!!」

「さ…サイン貰わなきゃ!？」

「お前ら宜しくな！」

207

この後の混沌とした有り様はとても表現出来ません。

第十一話『魔法学術都市アリアドネー』（後書き）

騎士団や女生徒達に、これといったモデルは居ません。

第十二話『学園生活・其の一』（前書き）

あゝだなはゝ、まぐねつと・じょゝ

第十二話『学園生活・其の一』

アリアドネー魔法騎士団候補学校生徒の刹羅です。

ラカン登場からの騒動も一先ず収まり、朝礼を終了して教室に移動。

因みに、余計なトラブルが発生しないように、ラカンが先生をしている事を知るのはアリアドネー魔法騎士団及び候補学校関係者のみ。

言いふらしたくてウズウズしている人も居ましたが、総長曰わく『軍人を目指すなら機密を守る事は重要です』との事。

公式の写真が教師コスプレバージョンなので、同姓同名の別人と思われるかも知れません。

僕と春さん秋さんが入るクラスは、1ーC。

教室で改めて自己紹介しました。

僕が朝礼で全校生徒の前で挨拶した理由は、此処が“女子校”で、僕が“男子”だからです。知らなかったら不審者と思われかねませんからね。

それにしても、朝礼で壇上から見回した時にも思ったのですが、この学園には色々な種族が居ます。

皆、外見上は同年代に見えますが、ヘラス族の例もありますし、実年齢はてんでバラバラかも知れませんね。

まあ、恐らく年齢千六百歳以上な両面宿儺の春さん秋さんの方が、

この学園の誰よりも遥かに年上――

……物凄い近くから、殺気の入った熱気と冷気を感じます。

クラスの皆さんも怯えているので、この思考は止めた方が良さそうです。

席は、一番後ろで三人一机。

右から、春さん、僕、秋さんです。

女性に囲まれてる感想？

周りが女性だらけの環境は、総本山で慣れてます。

さあ、授業です。

現在、お昼休み中です。

現在、春さん秋さんラカンと一緒に総長室に来ています。

全員、食事は終わってます。

現在、僕達の住居が決まっています。

春さん秋さんは生徒寮（女子寮）行きを拒否しました。

「——それでは、この中には希望の物件は無いと？」

「そうです」

全員ソファーに座り、テーブルにはセラス総長から早いとこ住むとこ決めろと朝の内に渡された住居物件チラシ数枚が広がっています。

希望する住居の条件。

【ど派手にドンパチやっても文句を言われない】。

こんな条件で住める家、普通はありません。

けど、毎日の修行の為には必須条件なんですよ。

「>ダイオラ魔法球くがあれば問題ないんですけどね」

「生憎とアリアドネーには無いわね。」

そもそも女性が多いから、余り使いたがらないのよ」

「...そうですか」

「んで、結局どうすんだ？」

「どうしましょ？」

「俺に聞かれてもなあ」

「何を迷う事があるのだ？」

「街中がダメなら、街の外に住めば良いのではないか？」

「確か、>魔獣の森とか言う場所があったな。

其処から材料を調達して、其処とこの地の間の野に家を建てよう。
それなら刹羅の言う条件に合致すると思うぞ？」

春さん秋さんがそんな事を言い出しました。

「…そんなの誰が建築するんですか？」

「無論、我々だ！」

「任せるが良い。

我等は技術に於いて天下に知られた飛驒の神。
家の一つを建てる位、造作も無い」

…もう、何でもありな気がして来ました。

「そうですか。

ですが、お二人だけを働かすのは気が引けるので僕も手伝います」

ペンを取り出して、チラシの裏に家の図面をサラサラと書いてみました。

「面白そうだから俺様も手伝ってやるぜ」

「貴様に大工仕事など出来るのか？」

「俺に出来ねえ事は無え」

気がするんじゃないかって、何でもありませんね？

んで、放課後。

僕とラカンで、魔獣の森の木々をバツバツサと斬り倒し、セラス総長が紹介して来た女トラック野郎な船長の輸送船で春さん秋さんが待つ建築現場まで運搬し、僕と春さん秋さん、千の顔を持つ英雄くを大工道具に変えたラカン、更に人手不足は僕の式神く数体を使って補い、一夜城どころか一時間で家を完成させました。呪符で、耐久性、腐敗、害虫、防犯等の対策を施してあります。

ああ、魔獣達には“お話”をして大人しくしていて貰いました。

家のデザインは、某オーブハンターの【陽だまり邸】。

これで、家賃を払う必要も無く、近所迷惑もかけずに修行が出来ま

す。

通学（通勤）時間？

この程度の距離、僕達には五分もあれば、一っ飛びですよ。

だったら市内に部屋を借りて、修行の時だけ市外に出ろって？

時間的には兎も角、気持ち的に往復が面倒です。

入学二日目。

クラスは、二酸化マンガンと塩酸を混ぜ合わせてカブトムシを発生させる実験授業の後、次の授業【飛行訓練】に移ります。

女生徒は全員ブルマ姿。

僕はジャージで校庭に集まりました。

更衣室やトイレは男性教師用のを使わせて貰ってます。

「あら？セツラ君？」

「ハルちゃんとアキちゃんも居るけど、三人とも飛行訓練に参加するの？」

クラスメイツから疑問に思われました。

まあ、『この授業の間は、治癒魔法の研究をする』と、そう言うたのですから当然ですね。

昨日の授業には【飛行訓練】はありませんでした。

「初めてなんで、色々と教えてくださいね？」

「あ？え？

そ…そんな事を言われなくても、私も未経験でして。

あ、でも、ちゃんと知識はありますから……」

「私もただけど、年上なんだし、ちゃんとリードしないとダメよね」

気のせいでしょうか？

何だか会話が噛み合っていないような？

「き…貴様等、何を誤解している！？」

刹羅は、全く授業に参加しないのも気が引けるからと、最初位は参

加する事にしたのだ!!」

春さん、説明ありがとうございます。

でも、誤解ってどんなんだろう？

「私達は箒に乗る事に初心者なのでな。
邪魔になるかも知れんが宜しく頼む」

……何でしょうか？

秋さんの笑顔が恐いです。

氷の微笑？

「あ…あら？そう言う事ですの？
ほほほほ、邪魔だなんて思いませんわ、アキさん？」

「あ、そっか。

魔法が大々的じゃない旧世界から来たんだもんね。

セツラ君が私達のブルマ姿に誘惑されたのかと思っちゃった」

「そ…そうなのか!？」

(ならば今夜にでもこの衣装で…!!)」

「違います!」

春さん、信じないでください！
皆さんが可愛いのは認めますが、別にブルマ姿が見たい訳ではありませんよ！」

本当ですよ？

本当に本当ですよ？

皆さん、本当に可愛いです。

大事な事ですから、何度でも言います！

誰ですか『そつちかい』とか突っ込んだのは？

他に何があるんです？

ん？皆さんの顔が赤いですね？

集団で風邪ですか？

と、なんやかんややってる内に、担当の先生がやって来て授業開始

授業の課題は【自由演技】。

二人一組で順番に校庭と言つか校空を飛び回ります。

初心者には難易度が高くな？

先ずは基本を教わり、最初に全員での軽いランニング的なフライトの後、本番開始。

授業はドンドン進み、春さん秋さんの番となりました。

『無理はしなくて良いわ。初心者なんだからね』

「心配などいらん！」

「刹羅、良く見ておいてくれ！」

先生の忠告を何処吹く風と、箒に跨った春さん秋さんが、無責任男が活躍する何処かの宇宙時代の撃墜王な双子姉妹の如く空を飛ぶ。

春さん秋さんの番が終わり、次は僕です。

生憎、僕には相方が居ませんので個人演技となります。

箒に跨り空を飛べば、鷹の誇りは俺のものとかに、気分はハイ・オーバートップ！

風も震えるヘアピンカーブを怖いものかと、シフトアップ！シフトダウン！ヒール&トゥ！

フルスロットル全速力だあああああ！！

『せ…セツラ君、速過ぎるよお！？』

『わわ！？凄じ上手い！！』

『初心者って言っていないませんでしたか!?!』

「デルタ・アクセル・シンクロ
神化法は光をも超える!?!」

『消えた!?!』

『何時の間に後ろに!?!』

『何で、セツラ君の筈が>火の鳥くみたくなってますの!?!』

少しネタに走り、かつ飛ばし過ぎました。

ハンドル(?)を握ると性格が変わるみたいです。

誰ですか『いつも通りだ』とか突っ込んだのは?

まあ、結構スカッとするので、これからも偶に参加する事にします。

第十二話『学園生活・其の一』（後書き）

クラスメイツの名前？

特に決めて無いッス！

第十三話『学園生活・其の二』（前書き）

クラスメイトの名前を考えた方が良いのかな？

第十三話『学園生活・其の二』

刹羅です。

入学して数ヶ月が経過しました。

これといった問題も無く、穏やかに過ごしています。

「何となく気になったんだけど、セツラ君達って主従なんですよ？
パートナーとして仮契約を結んでたりしてるの？」

教室で、クラスメイツからそんな事を聞かれました。

「どどどどど、どうなんですの！？」

「な…何を慌てているんだ、お前は！？」

春さんがクラスメイツの呼び方を“貴様”から“お前”に変えてます。

「そもそも、パートナーとか仮契約とかの意味が分からんのだが？」

「ああ、そうなんだ。

パートナーって言うのは、主を守る従者の事で、仮契約はキスとか

でその証のカードが手に入るのよ」

「なん…だと…」

「…ほう」

秋さんが狩人のような目で僕を見ました。

「…刹羅、今すぐ主従の証を立てよう」

「ちょ…ちよつと、アキさん!？」

「秋、抜け駆けは…!!」

「え…え〜と？」

秋さん、この場で口付けを交わしても仮契約は成立しませんから、顔を近付けないでください…」

「む？そうなのか？」

秋さんの顔が離れました。

「そうよ。」

するなら、街に仮契約屋があるから、そこで出来るわ」

「ほ…本当か!??場所を教えてください!」

「帰りにでも寄ろう、刹羅。答えは聞いて無い」

「いや、聞いてくださいって！」

本気で僕と仮契約がしたいんですか？」

「主従としての明確な証が手に入るのだから当然だろう。それとも、私達と口付けを交わすのが嫌か？」

「……刹羅」

…春さん、捨てられた子犬のような目で見ないでください。

「い…嫌と言う訳じゃないんですが、仮契約は魔法使いとしての主従契約。」

僕達は未だ魔法を学んでいる身なので、せめて、この学校を卒業するまで待つてください」

「むう…まあ、良からう」

「分かった。刹羅、約束を忘れるな」

「だ…大丈夫です」

これで良かったんでしょうか？

更に数ヶ月経過しました。

もう幾つ寝ると、年に一度のオスティア記念式典が開催されます。

アリアドネー魔法騎士団は、其処で警備の仕事を担当。

その為の人手を、この学園各学年からも二名募集。

現在、選抜試験>100キロ箒ラリー<開催中です。

僕は出てませんよ。

春さん秋さん達とモニターで観戦しています。

あ、参加者の服が弾け飛んだ。

「見るな！」

秋さんの手で目を隠されました。

「…これが、ラカンが言っていた事か」

「…秋さん、まだ目を開けちゃ駄目ですか？」

「ああ、済まん」

秋さんの手が離れました。

「しかし、随分とふざけた勝負事だな！」

「姉者と同感だ」

「あれでも実戦に必要な要素が込められてるそうですよ」

「その通りよ」

「…セラス総長」

セラス総長が此方に近寄って来ました。

「あれの何処にそんな要素があるのだ！

あの者達が気の毒ではないか！」

「目標地点への到達速度、魔法技術、戦法、その他諸々。それに、実戦は命のやり取り。服が脱げた位で動揺しては話にならないわ。どんな状況でも諦めないという心構えも大事よ」

「う…ぐ…！」

「…言いたい事は分からんでも無いが、納得は出来んな」

「…私としては、あの光景の方が納得がいかないわ」

モニターには、トップが>魔獣の森<に差し掛かり、其処で鷹竜やら隻眼の大熊やら巨大な白鼬やらの魔獣達が旗を振ってレース参加者を応援してる姿が映ってます。

良く、休日に>魔獣の森<で修行している内に彼等と友達になりました。

レース参加者に悪さをしないように言っております。

「正直に言つて、刹羅君達なら、このままオスティアに行けるわよ？」

「どうせなら、拳闘士大会の参加者として行きたいですね。まあ、出場権がありませんが」

「だったら俺がねじ込んでやろうか？」

今度はラカンが現れました。

「影の出資者権限という奴かしら？」

「まあな」

「レースの生観戦はもう良いんですか？」

「全員、街の外に出ちまったしな。んで、拳闘士大会はどうする？」

「では、お願いします。」

ですが、そういうズルで出場するので、ハンデとして僕一人が出場します」

「な！？ま…待て、刹羅！！」

「…本気なのか？」

「本気です。」

春さん、秋さん、心配しないでください。油断や慢心をしている訳ではありません」

「修行で随分と実力も上がってるしな。」

俺様クラスじゃねえと相手にならねえだろ。

その時の体調も重要だけどな」

「確かに体調も重要ですが、最も得意な＜神鳴流＞が見せ物には使えませんので、僕が使える他の術の練度を上げる必要があります」

まあ、亜流の＜紅蓮剣＞や＜紅牙烈風＞なら使えるかな？

大会で使える術は、＜西洋魔法＞、＜ラカン流喧嘩殺法＞、＜咸卦法＞、それと＜神化法＞ですね。

自分の使える術を挙げていたら、『一人・紅き翼（+α）』になりかけている事に気が付きました。

次に身に付けるのは>重力魔法かな？

「刹羅、私と姉者も共に行くぞ。

刹羅が試合に集中出来るように、身の回りの事は私達に任せて貰おう」

「はい、お願いします。

という訳でセラス総長、後で休学届けを提出しますね？」

「……此处で駄目って言ったら空気が読めないと言われるそうね？
良いわ、行つてらっしゃい。

その代わり、問題を起こさないように気をつけるのよ。

それと、帰って来たら補習授業よ」

「分かりました。ありがとうございます」

こうして、オスティア拳闘士大会に出場する事になりました。

第十三話『学園生活・其の二』（後書き）

誰か『僕考えた拳闘士』を送ってくれないもんかね？

第十四話『オスティア拳闘大会・予選』（前書き）

時間が掛かってごめんなさい。

言い訳：相手が二人一組だから、殺陣を二つ考えねばならんのが面倒くさい！

第十四話『オスティア拳闘大会・予選』

刹羅です。

現在、お祭り真っ最中の新オスティアまで来ています。

オスティア旅行は、アリアドネー巡洋艦　ランドグリーズ　に乗って、騎士団と道連れ。

部屋割りは、僕とラカンが同室。春さん、秋さん、ネネ先生、見習い騎士が同室。

道中では、僕は仕事をしに来た訳じゃないんで、等価交換として艦内料理人をやっとりましたよ。

春さんには、同室の秋さんと見習い騎士団員から勉強を見て貰いました。

んで、授業終了後に御褒美のお菓子を作って部屋に持って行ったら、秋さんと見習い騎士達が『たれ春さん』を愛でるように見ていました。

ラカンは部屋で酒かつくらってただけです。

毎日のようにラカンの分の書類仕事を押し付けられているネネ先生も、今回は僕達の引率で同行しています。

何故、ネネ先生が春さんに授業をしなかったのかって？

ネネ先生は、オスティアまでは完全休業でした。前述した通り、ラカンで苦労してますからね。最早、書類仕事をこなすスピードは本気を出したパタリ。を超えてるかも知れません。

オスティアと言えば、総督のクルト・ゲーデルが 神鳴流 の兄弟子なんで、挨拶回りに行くべきなんでしょうかね？

謁見式では総督からの話しを聞くだけだったんで、時間のある時に挨拶の序でに用意した手土産を持参して“あの映画”の複製が貰えないか交渉してみようかと思っています。

断られた時にはマスターテープを無断で永久借用させて貰おう。

と、そんな事よりも皆さんお待ちかねの超人タッグ・トーナメントではなくて、オスティア拳闘大会。

僕は、ラカン推薦の招待選手って扱いです。

オーガと天内みたいなもんですかね？

先ずは予選一回戦。

〈予選Aブロック闘技場〉

『——あのジャック・ラカンが今大会に送り込んで来た刺客！ 素性・経歴、一切不明！ しかもタッグ戦に一人で挑もうとは自信が無謀か！ 招待選手の“羅刹”……！』

司会の悪魔娘からのネーム・コールを受け、闘技場へと足を踏み入れる。

僕の格好は、上下共に白の剣道着。左手に納めた、樹齢三千年の一位櫓から造りあげた白木の大刀木刀。足は白い足袋に草履履き。首から懷には、長い間身につけていたら何の因果か御都合主義か、それとも愛の力か『いややわ……』……つてのは冗談として『なん……やて……？』、何時の間にやら 魔法発動媒体 になっていた、このちゃんから貰った 御守り を下げています。殆どマツシロシロスケですね。

何か途中で電波が飛んで来たような気がしましたが、気のせいでしょうか？

野太刀 飛天 は、春さんやラカン等と一緒に貴賓席で観戦中の秋さんに預けてあります。

んで、お祭り警備隊たるアリアドネー関係者が拳闘大会に出場するのは、禁止こそされてはいないけど世間的にどうかかってのと、世の中には“ネギま転生者は拳闘大会に出る際には正体を隠さねばならぬ”と言う 鋼鉄の掟 が存在する為、アリアドネー魔法薬品店で学割購入した年齢詐称薬を飲んで外見を十五、六歳にし、名前を 羅刹 に変えました。

うみゅっ！ パーペキな変装です！

そういや、すっかり描写を忘れていた髪型ですが、髪が背中の中分くらいまで伸びていて、普段は首の後ろで紐で一つに束ねていますが、今回は転生者らしくポニーテールにしています。

何かあった場合に備えて前日に変身後姿を春さんと秋さんや騎士団の方々に見せたら何故か皆さん鼻をおさえてました。

歩を進め、立ち止まって対戦相手と向かい合い、一礼をする。

対戦相手は共に忍者のような格好で、黒い服のウサギ男ジャンゴ・キネーセと灰色の服のパンダ男ハウ・キャウです。

『開始!!』

く三人称く

注）刹羅の事は『羅刹』で進めます。

試合開始宣言直後、パンダ男が真後ろに飛び退いた。
ウサギ男はその場で両腕を背中に回し、二本の鎌を取り出して構えを取った。

羅刹は木刀を抜かず、自然体で立って居る。

「必殺—— 鎌斬り剣法　！！」

ウサギ男が地を蹴って羅刹との間合いを詰める。

「あああああきいいいいいいいつ！！」

『先に仕掛けたのはジャンゴ選手！　必殺の二丁鎌が羅刹選手に襲い掛かる！』

ウサギ男の二丁鎌による連続攻撃。

『しかし、当たらない！

羅刹選手は風に舞う羽毛の如く攻撃を躲している！』

羅刹は、空を引き裂いて縦横無尽に走る二本の鎌の動きを見切って全て紙一重で躲し、真後ろに飛び退いて間合いを離れた。

「—— 魔法の射手・収束・光の45矢　！！」

其処へ、呪文詠唱を終えたパンダ男が杖を翳して、複数の　光の矢を凝縮して一塊にした光弾を、自身と羅刹との間に居るウサギ男

を避けて右斜め前方に向けて放った。

光弾には追尾機能が付与されており、弧を描く軌道で羅刹へと迫る。

「―― 紅蓮剣・紅月 ！！」

羅刹は左足を一步退き、抜刀術の構えから木刀を真一文字に抜いて空を切った。

太刀筋に残った紅蓮の三日月が光弾を真つ二つに切り裂き、光弾は白い光芒となって碎け散った。

羅刹が平正眼の構えを取り、僅かに身を沈めて、流水の如き踏み込みでウサギ男との間合いを詰める。

「―― 秘剣・散弾突き ！！！」

「げべろべえっ！？」

羅刹は一瞬にして数十発の刺突の乱撃をウサギ男に向けて繰り出し、両手の鎌を破壊しながら身体を宙に吹き飛ばした。

ウサギ男は地面に仰向けに倒れて気を失った。

『羅刹選手、攻勢に転じた途端、あっという間にジャンゴ選手を倒した！』

「くっ……！ 魔法の射手・光の3矢 ！！」

羅刹のもう一人の対戦相手であるパンダ男が無詠唱で光の矢を撃った。

羅刹が光弾を切り払う間にパンダ男は次の魔法の呪文を詠唱する。

「ヨーフク・サンチャク・マトメガイ！！

来たれ雷精、風の精！！ 雷を纏いて吹き荒べ南洋の嵐！！」

「プラクテ・ビギ・ナル！」

光弾を全て切り払った羅刹は、木刀を地に突き立て、某霊界探偵の必殺技の構えを取って呪文を唱える。

「―― 雷の暴風 ！！！！」

「―― 火よ灯れ ！！」

パンダ男の放った雷を纏った竜巻を、羅刹は右手人差し指から撃った火炮で相殺した。

「ばかなっ！？」

『な……何と言つふざけた威力だ！　羅刹選手、大魔法を初心者用呪文で相殺した！』

羅刹はパンダ男が動揺している隙をつき、無手の状態のまま滑るような歩法で地に弧を描いてパンダ男の背後に回り込んだ。

「しまっ……！？」

ウサギ男の背後を取った羅刹が、全身の捻転によって生じた力を右掌の一点に集め、前方に倒れ込むようにしながら右腕を真っ直ぐ前に突き出して、掌打をパンダ男の背中のド真ん中に叩き込む。

「——螺旋掌　！！！」

「くえっれえええるっ！？」

羅刹の右掌から放たれた螺旋状の衝撃波がパンダ男の体の中を突き抜けた。

パンダ男もまた、気を失って地に倒れ込んだ。

パンダ男、気絶により戦闘不能。

『勝者、羅刹選手!!』

羅刹、予選一回戦突破。

（二日目）

予選二回戦。これを勝てば決勝トーナメント進出となる、予選の決勝戦でもある。

対戦相手は、人間の男二人。

一人はオールバックの金髪、男臭い顔、左頬に十字傷、両肩・胸部一体型の鎧、黒いズボンとブーツ、背中にバスタード・ソードを袈裟懸けに背負った、名はオズマ・ミエナ・イスウィング。

もう一人は腰まで届く真っ直ぐな黒髪、一見女性と見紛いそうな顔、上下共に真っ赤なカンフー服のような服、黒いブーツ、腰の剣帯に日本刀の大刀を差した、名をナマール・ダ・ガーヤ。

『開始!!』

試合開始直後、オズマは背の剣を抜いて正眼に構え、ナマールは抜刀術の構えを取った。

羅刹は一回戦と相変わらずの自然体だ。

「ふっ！」

オズマが大きく跳躍して羅刹の間合いへと飛び込んで来る。

ナマールは羅刹が動いた瞬間に斬り掛かろうと、両足に力を込める。

「うおりゃ！」

オズマが宙で剣を大上段に構え、羅刹の頭上に真っ直ぐに振り下ろす。

羅刹は横っ飛びに躲した。

オズマは地を斬りつけた。剣圧が地を切り裂く。

『羅刹選手、オズマ選手の豪快な一撃を躲した！』

ナマールが羅刹の背後に回り込み、抜刀しようとした。

「うっ！？」

しかし、後ろを向いていたままの羅刹が、左手に持った木刀の握り部分を何時の間にか刀身から柄にずらし、切っ先をナマールの喉元に突き付けていた。

「ちいっ！」

ナマールは真後ろに飛び退いた。その瞬間、羅刹は未だ態勢を整えきれしていないオズマとの間合いを詰める。

「でいやあっ！！！」

オズマは片膝を地につけた状態から羅刹に身体を向けて立ち上がりながら、羅刹へと剣を逆袈裟に振り上げる。

羅刹はオズマの頭上を前方宙返りしながら飛び越えて、オズマの背後に回り込んだ。

オズマは剣を振り上げた反動を利用し、左回りに反転しながら袈裟切りを繰り出す。

羅刹も同じように左回りに反転しながら、オズマの剣の対角線上に右腕の掌底を突きあげる。

「―― 桜咲流無刀取り ！！！」

羅刹の掌底突きが剣の柄頭を叩き、オズマの手から剣を弾き飛ばした。剣はフィールド上のオブジェに突き刺さる。

「覚悟！」

羅刹はオズマの左脇を通り抜けながら木刀を真一文字に抜き、オズマの胴を薙いだ。

「ふ……」

オズマは満足そうに一つ微笑むと、地に倒れた。

羅刹とナマールが対峙する。

「……オズマの剣を弾き飛ばした技、俺にもやって見せろ」

「受けましょう」

ナマールの挑発に乗って、羅刹は木刀を地に突き立てて無手となり、両掌を軽く前に出して猫足立ちに構える。

ナマールはいきなり刀をすっぱ抜いた。踏み込まずにその場で水平に振るい、さらに空に十字を描くように下から上に切り上げる。

「（わざと空振った！？）」

そうと知りつつ、羅刹は高々と上がった刀に吸い寄せられるように踏み込んでいた。

ナマールはその動きを予想していたように地を蹴り、真後ろに跳んだ。

踏み込んだ羅刹は金縛りになった。ナマールが刀を目の高さに持ち上げ、切っ先を正面に向けて、弓に矢をつがえて引き絞るような構えを取った。

「——刺突！」

羅刹の 無刀取り は、九つのうち八つは取れる。だが、たった一つ返せない斬撃がそれだった。真正面からの突きには、付け入る隙はない。

誘いに乗って踏み込んでしまったため、この間合いでは至近距離でショットガンを向けられているのと同じだった。左右に避ける動作は命取りである。

羅刹は地を蹴って斜め後方に跳躍した。

「せやあああつー!!」

ナマールは放たれた矢のように一足飛びに突進する。実に五メートルの距離を疾風の如く駆け抜けたナマールが、ブレーキを掛ける。斬撃の軌道上にいたはずの羅刹は、虚空瞬動で上空に方向転換をして、難を逃れた。

落下してくる羅刹に、ナマールは再び刺突を放つ。

突き出したナマールの太刀が止まっている。その峯の上に羅刹の足が乗っていた。

羅刹が刀の上から、木刀の切っ先をナマールの額に突きつけている。羅刹は刀の上に乗る瞬間に、小物動かしで、地に突き立てていた木刀を手中に引き寄せていた。

「……ギブアップだ」

ナマールは己の負けを認めた。

『ナマール選手のギブアップ宣言により、勝者、羅刹選手！！
Aブロック優勝です！！』

これによって、羅刹選手の決勝トーナメント進出が決定しました！！
『！』

羅刹は刀の上から飛び降りた。

「……結局 無刀取り は出来ませんでした。強いです。オズマさんも、初見だから通用した感じですね」

「フ、オズマが起きたら伝えておこう。決勝トーナメント、頑張れよ」

「ありがとうございます」

羅刹とナマールは握手を交わして別れた。

羅刹——桜咲刹羅、決勝トーナメント進出。

第十四話『オスティア拳闘大会・予選』（後書き）

white seal様、白夜様。頂いた拳闘士案は決勝トーナメントで使います。white seal様の案は多少いじりますよ。次回はちよつと拠点フェイズ的な話しを考えているので、その次の回に出す予定です。

【羅刹】

刹羅が変装した姿。髪の毛の長さが少し足りませんが、髪にベタを塗ってない『D4プリンセス』の雷蔵がポニテにしたと思いいねえ。

そついや、『なななな』の主人公ってなんとなくネギと似てませんか？
ネギがモデルだったのかな？

【御守り】

中身は木乃香の髪の毛。刹羅が木乃香から貰って、お風呂の時以外に肌身離さずに持っていたら、木乃香との愛の力（？）が奇跡を起こし、何時の間にか魔法発動媒体になっていた。

没ネタ？

「―― 鎌斬り剣法 ！！」

「―― 素手バリア ！！」

ガキーン！

明らかに他の作者様のパクリ。

彼と同じく主人公の成長力に上限が無いから不可能ではない！

いつそのこと“カットマン”で……と、そんなキャラの話しが出る前から同じ事を何度考えた事か……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7932o/>

天翔る剣士

2011年11月9日15時02分発行